

聖霊降臨節講筈

この火既に燃えたらんには

2019年6月1日(東京 新宿)

日常生活に即したルカ伝 祈らないではいられない パリサイ人と取税人の祈り 汝の内なる光 十分の一献金 無教会出身 弟子たちの派遣 霊の次元 求めの切なるにより 身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者 自己紹介でキリストを告白する 水一杯にても与うる者 宝を天に積み ます神の国と神の義を わが子イエスよ、ぶつぶつ言っつんじやない 明日のことを思い煩うな 寝ずに主人を待つ僕 私たちが新しく生まれなければ 魂は霊体を与えられる 闇と光の霊の次元 なんじら心を騒がすな 聖書の中の宝物発見の旅 我は火を地に投ぜんとて来れり イエスの心を心とする なぜ私は永遠の闇に突き落とされるのか 祈り

●日常生活に即したルカ伝

だいたい、聖書は繰り返し読むものです。一回読んで、

「もう中味がわかったから、それで終わり」

なんてことは絶対ありえない。いろんな印刷物が氾濫していますが、その中で「これっ!」というものは繰り返し読む。聖書はそれに値するものだと思います。

最近、「令和」ということで、万葉集がまた読み返されるような時代になってきましたけれども、いいものは繰り返し読んで味わう。その中でとびつきりいいものは、新約聖書だと思えます。それから新約聖書の母体となっています旧約聖書の中の創世記とか、イザヤ書とか、そういった預言書の重要なところを全体的、立体的に捉え^{とら}ていくという読み方を、皆さんがそれぞれ、なさっていただければいいなという思いがしています。

今日は、「この火既に燃えたらんには」というタイトルを掲げました。ルカ伝12章49節のところ。皆さん、ルカ伝をお読みになるときに、

「あつ、これはマタイ伝ではあそこにあつたな」

ということを感じられると思う。マタイ伝とルカ伝と、書いてあることは同じであっても、場所がちがう。そういうことを比較してみられたことはありませんか。

「マタイ伝ではここに書いてある。ルカ伝ではこんなところに出てきている。なぜなんだろうか」

と。マタイ伝は、整然とあとから編集されて、なにかまとめ上げられているという感じがする。非常に荘厳で——まあ大袈裟に言えば、ものものしいというかな——格調が高い。それに対してルカ伝は、

「あつ、イエスはこういう場面でこういう時に、このことを語られたんだな」

ということがよくわかるような、日常生活の中に入りこんできて、日常生活でイエスが歩



んでおられる歩みの中で、

「こういう場面で、こんなお言葉を語っておられる。こういう場面でこうだ」

と。それをマタイ伝は全部寄せ集めてきて、ひとつの論文スタイルでピシッとまとめ上げているという感じがする。つまり、格調が高く荘厳である。しかしながら、イエスは決して、マタイ伝に書いてあるあれだけの内容をいつときにお話しになることはまずあり得ないだろうと思う。語られても、聞くほうには重すぎてたまらんですよ。

随所随所でイエスが語っておられるものを集大成したものがマタイ伝だとしたら、ルカ伝は、もういちど随所随所で、台所で働いている時にイエスはこんなことをお話になった、弟子たちがこんなことをやっている時にイエスはこうお話しになったというふうには、日常生活の中に即してそれぞれ語られている。ある意味では、いわば平地で語られている。山上の垂訓ではなく、山の上で語られたのではなくて、平地におり立って、そしてみんなが集まっている時に、

「それはこうではないのか」

と。たとえば、ボートに乗って漕ぎだして、それから陸にいる群衆に語られたとありますね、ルカ伝の5章に。ペテロはお魚がたくさんとれたので、びっくりしたという話があるでしょ。あれなんかも素晴らしい。朝がたペテロが夜通し働いて、プロの漁師が、魚が全くとれなかった。それに対してイエスが、

「沖に漕ぎだして、網をおろせ」

と言われた。ペテロは、

「プロの漁師に素人のあんたが何を言うんですか、プロのことはプロに任せなさいよ」

というくらいの気持ちだったのが、

「まあ、しょうがないですな。お言葉ですから、やってみましょう」

と。そして網を下ろしたら、その通りになった。それでびっくりして、平伏ひれふしたと書いてあるでしょ。

「私は罪深い者です、おゆるしてください」

と。皆さん、ああいうところの情景を思いうかべて、

「ああ、凄いな、凄いな」

という、心驚く思いでイエスのお気持ち、ペテロの気持ち——自分もペテロになって読むとか——そういう読み方をなされば、この新約聖書というのは非常にビビットに(vivid)生き生きとして皆さんの中に活き活きと生きかえってくる、よみがえってくる、そんな思いがするんです。小池辰雄先生は、

「聖書はドラマである。皆さんもドラマの中の一員になりなさい。時にはパウロとなり、時にはペテロになる」



と、そういうことを仰いました。ですから、そういう読み方をする。一生涯かかって、この新約聖書とつくんで、決して飽きはこない。そういうものであると私は思います。

● 祈らないではいられない

ルカ伝11章には祈りのことが出てきています。弟子たちが、

「どういふふうに祈つたらいいのか教えてください」

と。それに対して、「主の祈り」というのがある。マタイ伝では整然と書かれている。「主の祈り」が、少し短いですが、たぶんこれが本当の形であろうと言われている。

「祈るときに、こう言いなさい」

と。私のは文語訳です。

「²イエス言い給う『なんじら祈るときに斯く言え「父よ、願わくは御名の崇められん事を。御国の来らん事を。我らの日用の糧を日毎に与え給え。我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。我らを嘗試にあわせ給うな」』」(ルカ11・2〜4)

こちらのほうが非常に簡潔でしょ。大事なのはまず、

「御名を崇めさせてください」

という「御名」、これが第一にあげられている。それから、

「御国をきたらせてください」

マタイ伝では、

「天において御意が成ることく、地にも行わせたまえ」

というふうになっています。それがここでは、

「御名を崇めさせてください。そして、御国を地上にきたらせてください」

それからその次は、「ご飯のことです。

「日毎の糧をお与えください」

それから、

「負債ある者を免す」

というのは、自分に対して悪いことをした人間とか、いろいろ自分に対して道徳的な負い目を負っている者、それを

「私はもう何とも思っていないです。許していますから、あなたに対する私たちの負い目をお許しください」

という、これは人間関係で一番難しい問題ですね。人間関係でのいろんなことでの怨みつらみ、裏切り、そういうことに対しての釈然としない思い、それはたくさんあるはずですが、それが、何も社会の人間だけではなく、家族の中でもあります。夫婦の間でもあるかもしれません。親子の間でもあるでしょう。



「そんなものをすべて、もう私は水に流します。だから、主さま、あなたに対して私が負っている負債を、どうぞ、ゆるしてください」

と。先に自分が許しているから、許してくださいと。

「あなたが許してくださいれば、私は許します」

とは書いてない。

「私はもう既に許しました。だから、どうぞ、あなたもお許しくださいますように」と。そうでしょう。

「負債ある凡ての者を私たちは免しましたので、私たちの罪も免してください」

と。それから、

「嘗試にあわせなくてください」

と。この世は試みに満ちています。その試みに合わせなくてくださいと。非常に簡潔に、マタイ伝の「主の祈り」の莊嚴なるあの祈りの中のエッセンスを、我々の日常生活にふさわしい形に圧縮して、「こう祈りなさい」と言う。この祈りなら、誰でも祈れそうですよね。それから今度は、「求めの切なるにより」ということを言っておられる。

「⁵また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。⁶わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、⁷かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて与え難し」という事ありとも、⁸われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求めの切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。」(ルカ11・5〜8)

友だちがやってきて、

「パンをくれ。遠くから友だちが来たんだけれども、差し上げるものがないので」と言ってきた。そしたら、

「もう寝ているのだからゴチャゴチャ言うな」

と。友だちだからと言っても聞いてくれないけれども、「求めの切なるにより」と、そのまま言うならもうしょうがない——「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺がありますね——そこまで熱心に言うなら、「しょうがないいな」といつて聞くだろうと。

「ましてや、夜昼呼ばわる選民のために神さまは聞いてくださらないことはありえないよ」(ルカ18・7)

と。そういうことを言われた。ここでは、

「まして天の父は、求むる者に聖霊を賜わざらんや」(ルカ11・13)

と。これは18章にも祈りのことが出てきます。祈りは、この11章と18章の二か所に出てきていますから、両方をしっかりとつかまえて、結びつけてください。18章に、

「¹また彼らに、落胆せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言い給う。



2 『或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。3 その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたまえ」と言う。4 かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、5 此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩まさん」と』(ルカ18・1〜5)

これは小池先生は、「祈りの本質」という——これは名講筵です、あれはI君のお宅でほんの数名の祈祷会でお話になった。それを「祈りの本質」という黄色い表紙の冊子にまとめられている——あそこでこの、「常に祈るべきことを」というのを、小池先生は、

「祈らないではいられない」

というふうにごくお話になっています。「祈らねばならない」ではない。「祈らないではいられない」という祈り。その譬話として、不義なる裁判官は、神を神とも思わない、人なんて何とも思っていない。しかし、この寡婦はうるさくてしょうがない。これをなんとか聞いてやらないと、一生付きまとわられてかなわん、ストーカーみたい。だから、まあなんとかしてやろうと。そういう怪しからん裁判官だと。7節に、「まして」とある。

「6 主い給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、7 まして神は夜昼よばわる選民のために、たと遅くとも遂に審き給わざらんや。8 我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』」(ルカ18・6〜8)

「私が地上にやってきたとき、はたして地上に信仰が残っているだろうか。そのときはもう信仰なんてどこかへ無くなっているかもしれないな」と、ちよつと憂えられたことがこの18章に出てきます。

●パリサイ人と取税人の祈り

それからついでに、この18章で大事なところは、「パリサイ人の祈りと取税人の祈り」のことが9節から14節まで出てきます。これも非常に大事なところです。まずパリサイ人の祈りです。

「9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬を言いたもう、10 『11 人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。12 パリサイ人たちて心の中に斯く祈る

パリサイ人の祈りは、「私はこんな立派な人間にしていることを感謝いたします。あの門の外に居る取税人、あんなやつでないことを感謝します」と、非常に立派な祈りを、胸をはって堂々とやっている。

神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。12 我は一週のうち二度断食し、凡て得るもの



十分の一を献^{なげ}ぐ。

まあこうやって、胸をはって堂々と祈っている。それに対して取税人は、今でいうなら鳥居の外なんですよ、鳥居の中まで入れない。

¹³ 然るに取税人は遙^{はるか}に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫^{あわれ}みたまえ」

胸を打ちながら、「神さま、罪びとである私を憐れんでください」と、それしか言えなかった。

¹⁴ われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往^ゆけり。おおよそ己を高うする者は卑^{ひく}うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」(ルカ18・9〜14)

ところが、イエスは、

「神さまが喜んで、『ああ、わかったよ』といって受け入れてくださったのはこの取税人なんだ。胸をはって『感謝いたします』なんていうのはきらいなんだよ」

と言っておられる。これも往々にして、立派なクリスチャンというのは、こういうパリサイ人型なのが得意やすいんです。

「不信仰なあんな奴でないことを感謝します。私は毎週、聖日集会、礼拝に参加しております。献金も十分の一をしつかりやっています」

なんて言って、それを堂々と胸をはっている。「そういうものではないよ」ということを言われる。それから続いて、

「天国は、幼子^{おさない}のような素直な姿でなければだめだ」ということを言われる。

「¹⁵ イエスの触り給わんことを望みて、人々嬰兒^{みどりこ}らを連れ来^{きた}りしに、弟子たち之を見て禁^{いまし}めたれば、¹⁶ イエス幼兒^{おさない}らを呼びよせて言いたもう『幼兒らの我に来るを許して止むな、神の国はかくのごとき者の国なり。¹⁷ われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼兒のごとくに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能^{あた}わず』(ルカ18・15〜17)

と言われる。それから、

「どうやったたら永遠の生命を継ぐことができますか？」

という問答がある。いろいろとそういうことで、この18章は非常に内容の豊かな箇所です。

● 汝の内なる光

ルカ伝11章に戻ります。ここで祈りのことを言われて、それから少し飛ばしまして33節、

「³³ 誰も燈火^{ともしび}をともして、穴蔵の中または升^{ます}の下におく者なし。

燈火^{ともしび}というのは、見える所に置いておかないと、下に置いて覆^{おお}いでふさいでいるようでは、燈火の役目を果たせない。



入り来る者の光を見んために、燈台の上に置くなり。³⁴ 汝の身の燈火は目なり、
汝の目正しき時は、全身明るからん。されど悪しき時は、身もまた暗からん。
これもマタイ伝にもちゃんと、あの山上の垂訓の中に出てきてますよ。それをこういう箇
所で仰っている。

³⁵この故に汝の内の光、

「汝の内なる光」という。普通の人は肉眼の視力を問題にします。ところがキリストは、
「それも大事だけれども、もっと大事なのは、内なる光だ。人には見えない。けれ
ども、あなたの内なる光が本当に輝いているかね。そうしたら全身が明るい。内
なる光が闇ならば全身が暗い。たとえ肉眼の目は見えていても、本当は見えてな
いんだよ」

ということを言われました。

闇にはあらぬか、省みよ。³⁶もし汝の全身明るくして暗き所なくば、

内が輝いていると全身が明るい。そしたら、

輝ける燈火に照さるる如く、その身全く明るからん』(ルカ11・33〜36)

「輝ける燈火に照されるように、そのからだは全く明るくて、人々をも導いていくことが
できる」と言われた。

それから次はまた、パリサイ人との問答が出てきます。これも非常にパリサイ人の在り
方とキリストの在り方のコントラストがよく出てます。何かといいますと、パリサイ人は
外側なんです。すべて外側なんです。祈りだつてそうでしょ。

「人に見せびらかすように、街道の辻だとか、そんな所で長々と祈っている」(マ

タイ6・5)

と、マタイ伝にありますね。ところが、イエスは、

「戸を閉じて部屋にこもつて、隠れたるところを見たもう隠れたる父に祈れ」

(マタイ6・6)

と仰った。それと同じようにここでも、パリサイ人は食事の前に一生懸命に手を洗う。場
合によっては身体を洗う。そうやって外を清めて、それから食事にはいる。ところが、イ
エスはそんなことはなさっていない。ごくナチュラル (natural 自然のまま) なんです。それに
対して、パリサイ人が文句をつけたというのがここです。

「³⁷イエスの語り給えるとき、或るパリサイ人その家にて食事し給わん事を請

いたれば、

「どうぞ、食事に来てください」と、お食事に招いた。招いたけれども、ケチをつけている
わけです。

入りて席に著きたもう。³⁸食事前に手を洗い給わぬを、此のパリサイ人見て
怪しみたれば、



「あれ、この人は律法を犯している」というわけだ。

39 主これに言いたもう『今や汝らパリサイ人は、酒杯と盆との外を潔くす、されど汝らの内は貪慾と悪にて満つるなり。』

これもきつい言葉ですね。「あなたの内は貪慾と悪で満ち満ちている」と。

40 愚なる者よ、

「バカツタレ、バカ者めが」と、こんな感じですよ。

外を造りし者は、内をも造りしならずや。41 唯その内にある物を施せ。さらば一切の物なんじらの為に潔くなるなり。

だから、内側にあるものが自ずと提供されてくる。

「内側が清ければ、外側は問題ではないんだよ」

ということをここで言っておられる。

●十分の一献金

それから更に続きまして、「十分の一献金」のことも出てきます。

42 禍害なるかな、パリサイ人よ、汝らは薄荷・芸香その他あらゆる野菜の十分の一を納めて、

この「十分の一」をなぜ献げるのか。レビ族のためなんです。十二部族の中でレビ族はひたすら神に仕える仕事をやっている。働かない。だから、他の十一部族が自分たちが働いて得たものの十分の一をレビ族に献げることによって、レビ族は生活が保証される。そして、お勤めを果たす。その恵みがまた十一部族に戻ってくるわけです。そういう形で循環していく。そういうことで始まった「十分の一」なんですね。その後キリスト教会が受け継いで、十分の一献金とか、まるで律法のように言いますけれども。

あれは私にとっては、かつては非常に重荷になった。あるとき、宣教師が主導する聖会というのがありまして、八尾や奈良や何か三つくらいの教会の人が集まって聖会というのがもたれた。そのときに、

「何か、皆さん、質問はありませんか？」

と言われたので、私は手を挙げて、

「十分の一献金は、手取りですか、それとも天引き前ですか？」

と聞いた。答えてくれなかったです(笑)。いや、私にとってはものすごく大問題でした。名目の献げ物の十分の一と、手取りの十分の一とはずいぶん違うわけですよ、いろんなものが天引きされてますから。そのどれが本当の十分の一か、それをぜひ聞かせてもらいたいです。マラキ書には、

「神さまのものを、お前たちは盗んでいる」

と書いてある。あれがグサツときましてね、



「十分の一を献げないものは神さまに属すべきものを盗んでいる」と、ちゃんとマラキ書に書いてありますよ。旧約聖書の一番最後の書がマラキ書です。また、宣教師はそういうことをギヤアギヤア言う。そしたら、こっちは心がいつもグサツグサツと刺される。それで私は質問した。そしたら答えてくれなかった。

公平と神に対する愛とを等閑にす、されど之は行うべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。

だから、ここでも、「あなた方パリサイ人は、あらゆる収穫物の十分の一をきちんとやって、それで自分は義とされていると自惚れているけれども、神さまが求めているのは公平そして愛——神に対する愛、また人に対する愛でしようね——それを求めておられる。キリストはその両方が大事だということをここで言われた。つまり、公平と神に対する愛は、どんなことがあってもやらなければならない。だからといって、十分の一はどうでもいいとは言わない。まあそちらのほうも一応、大事にするんだよと。一応、律法というものに対して敬意を表しておられるわけです。

43 禍害なるかな、パリサイ人よ、汝らは会堂の上座、市場にての敬礼を喜ぶ。

つまり、人に見えるところを非常に重んじている。ところが内側はまったくわからない。

44 禍害なるかな、汝らは露れぬ墓のごとし。其の上を歩む人これを知らぬなり』

墓というのは不吉なものです。墓の上を歩くと、その不吉なものが自分に移ってくるという。そこで白く塗っておくと墓の祟りがこないというので、非常に墓の上は白く塗ったそうです。パリサイ人はそんな者だと。白く塗っているから、人から見たら無難、無事に見えるけれども、実は内側は貪欲でしようがないやつらだと。そういうような厳しい批判なんです。だから、次にあるでしょ。

45 教法師の一人、答えて言う『師よ、斯かることを言うは、我らをも辱しむるなり』

律法学者の一人が、「先生、そんなことを仰るなら、我々に対する侮辱ですよ」と言ってプロテストしている。そうでしょ。そんなふうにお読みになりますか、皆さん。この背景というか、情景というのはそういうもので、一つひとつ非常に意味が深い。そしたら今度は、その言葉を受けて更に烈しいことをイエスは言っておられる。こんなことを言えば、殺されるのしようがないですわ、イエスは憎しみを買って。

46 イエス言い給う『なんじら教法師も禍害なる哉。なんじら担い難き荷を人

に負せて、自ら指一つだに其の荷につけぬなり。

それを肩代わりして担ってやろうなんていう気持ちは全然ないではないかと。そういう言葉なんですね。私はこれを読んだら、痛快で仕方がない。だいたい、宗教家というのはこんな人が多い。立派なことを言っ、人々をさんざん焚きつけておきながら、自分は一体いかなる者なのかという、そんな感じを受けました。



「なんじら教法師も禍害なるかな。担い難い荷物を人に負せながら、自分では指一本触れようとはしない」

と。いや、今日はね、高田馬場へくるのに、私はいろいろな方に助けてもらいましたよ。荷物を持つているでしょ、そうすると、階段の番をしているおじさんが寄ってきて、荷物を担いでくれる。そうかと思うとまた、全然知らない人がパツと寄ってきて、荷物を持つてくれる。「ああ、日本も捨てたものではないな」と思った。白髪の年寄りくさい、腰のまがった老人が重い荷物でフウフウやっている。放っておけようかというわけです。本当に昨日、今日というんな方にそういう慈しみあふれる行いに私は感動してここへ来ているんですよ。きつと、そういう人たちは、天国へ行ったら、

「あなたはよく私を助けてくれた。私がしんどい時に助けてくれたよね」

「いや、全然助けた覚えはありませんが」

「あの奥田というのが苦しんでいた時に、あなたはその荷物を持ってあげただろ。

あれは私にしたんだよ」

と、きつとキリストはそう仰る。そういうものなんです。パリサイ人と違うんです。貧しい人、苦しんでいる人に対して、水一杯さしあげる。荷物を持ってあげる。

「それは私に対してしているんだよ」

と、そう仰るのがマタイ伝26章にちゃんと出てきます。羊と山羊を分かち、羊はそうやって親切なことをやった人、山羊は偽善者の人。このパリサイ人はどうもその、

「背負い難い荷物を人に負せながら、自分は指一本触れようとはしない」

という類なんです。散々そのあとキリストはそういうパリサイ人を非難しておられます。

禍害なるかな、汝らは預言者たちの墓を建つ、之を殺しし者は汝らの先祖なり。

48 げに汝らは先祖の所作を可しとする証人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝ら

は其の墓を建つればなり。49 この故に神の智慧、いえる言あり、われ預言者

と使徒とを彼らに遣さんに、その中の或者を殺し、また逐い苦しめん。50 世

の創より流されたる凡ての預言者の血、51 即ちアベルの血より、祭壇と聖所

との間にて殺されたるザカリヤの血に至るまでを、今の代に糺すべきなり。

然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺さるべし。

あのカインとアベルの物語があります。神さまはアベルの献げ物を喜ばれて、カインの献げ物を顧みられなかった。そこでカインはアベルを妬んで殺してしまったという物語が旧約聖書の創世記に出てきます。そのアベルの血より、そして祭壇と聖所の間で殺されたザカリヤの血まで、いわば神の義人たちをいろんな形で迫害したり殺したりしてきた。それは必ず最後の審判の時に裁かれる時がくるということ言われた。それから、

52 禍害なるかな教法師よ、なんじらは知識の鍵を取り去りて自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり』(ルカ11・37〜52)



と。しかもだいたい、二人ずつペアで遣わしておられるのが9章に出てきます。そして、弟子たちは、やつたら「すごい成果がありました」と、成果報告会をやっているわけです。ちやうど、オリンピックでたくさん日の丸を揚げて帰って来て、報告会をやりますね。あれみたいなことをやっているのが9章10節です。皆さん、福音書に親しんでください。もうビンビンときてわかるように、精通してくださいね。

「¹⁰使徒たち帰りきて、其の為しし事を具にイエスに告ぐ。イエス彼らを携えて竊にベツサイダという町に退きたもう」(ルカ9・10)

そういう報告を聞いて、また町に退かれたということがあります。それから、もう一か所は10章に出てきます。今のは十二弟子を遣わされたお話でしたが、10章では、

「この事のち、主、ほかに七十人をあげて

と書いてます。十二弟子を選ぶ前にキリストは徹夜の祈りをなさっている。徹夜の祈りをしたのちに十二弟子を選んで、そして遣わされる。それから今度は10章では、他に七十人——七十人とは相当な数ですよ——それをまたペアにして二人ずつ遣わされる。

自ら往かんとする町々処々へ、おのれに先だち二人ずつを遣さんとして言

い給う、²『收穫はおおく、労働人は少し。この故に收穫の主、労働人を

その收穫場に遣し給わんことを求めよ。³往け、視よ、我なんじらを遣すは、

あなた方を——これはイスラエルの中へ伝道に行かされて、異邦人の所へではない——イスラエルという自分の民の中へ遣わすにあたって、

「^{こひつじ} 羔羊を^{おおかみ} 豺狼のなかに放り込むようなものだ」

と、こういうことを言っておられる。同胞でしよ、イスラエルは。同胞の中にキリストの弟子を七十人——これはいうならば素人ですよ——そういうものを遣わす時に、「あなた方を遣わすのはあたかも羔を狼の中に、いちばん弱い羔を狼という猛々しいものの中に放り込むようなものだ」と言われた。

⁴財布も袋も鞋も携うな。また途にて誰にも挨拶すな。⁵孰の家に入るとも、

先ず平安この家にあれと言え。

「まず平安をその家に祈りなさい」とか、いろいろ細かく指示を与えておられる。そして、その七十人が成果報告をやっている。それが17節です。楽しいですよ。

¹⁷七十人よろこび帰りて言う『主よ、汝の名によりて悪鬼すら我らに服す』

¹⁸イエス彼らに言い給う『われ天より閃く電光のごとくサタンの落ちしを見たり。』

イエスは、

「はい、見えてたよ。天からサタンが落ちるのが見えたよ。地上でサタンは、人を通して変なことをやって、悪事を働いている。しかし、それは霊界のサタンが天



から、いわば指図して人を捕まえてやらせているだけだ。そのことが見えてたよ」ということを言っておられます。

19 視よ、われ汝らに蛇・蠍を踏み、仇の凡ての力を抑うる権威を授けたれば、汝らを害うもの断えてなからん。20 されど霊の汝らに服するを喜ぶな、汝らの名の天に録されたるを喜べ」

「霊が服従するからといって喜ぶのではないよ。あなた方の名前が天に録されている。これを喜びとしなさい」

と。我々は地上のことで、やれ、「病気が癒されました、治りました。こんなことがありました。お金がもうかりました。助けてもらいました」なんて、それは確かに感謝かもしれない。でももつと喜ぶべきは、

「あなたの名前が天に書かれている。つまり、天国人にされていることだ。それを喜びなさい」

と言われた。そしてそのあとで、

21 その時イエス聖霊により喜びて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智きもの慧き者に隠して、嬰兒に顕したまえり。父よ、然り、此のごときは御意に適えるなり。22 凡ての物は我わが父より委ねられたり。

子の誰なるを知る者は、父の外になく、

イエスは自分のことを「人の子」と言われた。「私は何者か」という本質を知っているものは父なる神さま、あなたの外になく、

父の誰なるを知る者は、子また子の欲するままに顕すところの者の外になし』
そうやって感謝の祈りを捧げられた。それから密かに言われた、

23 かくて弟子たちを顧み竊に言い給う『なんじらの見る所を見る眼は幸福なり。24 われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞かざりき』(ルカ 10・1〜24)

「あなた方の見ている所を見る眼は幸いだ。今まで預言者たちも見たくて見られなかった。それをあなた方は今ちゃんと見せていただいているんだよ、すごいだろ」

と。私たちはそういうものを見せていただいている。これはその当時の弟子だけではない。十字架・聖霊をいただいた我々はイエスが望んでおられた霊の事態、霊の次元をいただいている。

● 霊の次元

私は今、「霊の次元」と言いました。「霊の次元、天の次元」とは何かといいますと、ヨハネ伝3章にあります。



「人、新たに生まれずば神の国を見ることあたわず。人は水と霊から新しく生まれなければ、神の国に入ることもできない。肉から生まれる者は肉である。霊によって生まれる者は霊である。風は思いのままに吹いている。その風がどこから来てどこへ行くか誰も知らない。新しく生まれる、霊から生まれる、これも同じことだよ」(ヨハネ3:3~8)

ということをニコデモとの問答で仰っている。あれは非常に大事なことです。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもて拝すべきなり」(ヨハネ4:24)

と、サマリヤの女との対話の中でも仰っています。そして、「人新たに生まれずば」ということを仰っている。だから、

「人の生くるのはパンのみによるにあらず。神の口から出る一つひとつの言ことば

によって生きる」(マタイ4:4)

という、その「神の言ことば」というのも霊の言なんです。その霊の言である中味は何か。それはヨハネ伝6章に出てきます。

「我をくらえ、我を飲め」

と言われた。あの6章では繰り返し、

「私を食べる、私を飲め。私と一つになれ」

と、もうくどいほど言っておられる。

「モーセが与えられたパン、鶉うずらがきたり、マナがふってきたり、いろいろしました。でも、みんな死んだ。どんなにモーセが素晴らしいことをやったと

しても、それは一時的なものだった。永遠ではなかった。でも、私は天から

降くだってきた生命のパンである。私を食べる者は永遠に生きる」

と繰り返言っておられるのはヨハネ伝6章です。しかもヨハネ伝6章63節のところに、

「⁶³活いのちかすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」

と。ああいうところはしつかりつかまえていただきたい。聖書というのは、漫然とダラダラ読むのではなくて、ポイントをつかまえて、しかも、ポイントとポイントが繋がっているところがある。それを数珠じゆずつな繋ぎにつないでいく。そういう形で関連付けて立体的に読んでいく。そういう読み方をぜひなさってください。それは一人ひとりが発見していくものだと思います。皆さんそれぞれに自分独自の聖書の読み方をつくりだして行ってほしい。それを持ち寄って集まってくるのが集会です。集会は、誰か一人が素晴らしいことをしゃべって、聴いている者が「ハッハッア」と畏れかしこんで聞く(笑)、そんなのではない。「聖書を生きたる、キリストを生きたる」と、こないだの集会でやりました。それを日頃皆さんがなさっていて、

「この一週間こんな凄い体験をしました。こんな凄い御言みことばにでつくわしました。も



う心が躍っています」

と。そういうものを携えて持つてくる。十人が一つずつ持つてきたら、十倍になります。それが私は集会だと思つてゐる。それは皆さんがお互いにそれを分かち合うと共に、真ん中に立つておられる復活されたキリストに対する捧げ物である。それが私は生きた集会だと思ふ。そういう集会をやつてください。集会で先生の話を聴く。これは呼び水だと思つてください。先生の話を聞いて、

「ああよかった、今日はよかった。もうめでたい、めでたい。サヨナラ」

で帰つたら、それを繰り返してもだめなんですよ。それは呼び水ですから。先生の話を呼び水にして、皆さんお一人お一人が、真ん中に立つていらつしやる復活のキリスト、御霊のキリスト、そのお方と一つとなつて、

「ありがとうございます。この集会にきて、また廻りました。これから一週間、どうぞ、あなたと一緒に歩ませてください。そして、来週集まるときは、また一段と素晴らしい姿になつて、ここに集わしてください」

と、その繰り返し。それが私の理想とする集会なんです。だから、語り手はどこまでも誘い水を出しているだけです。

「この水を飲む者はまた渴かん。されど、わが与える水は永遠の生命の泉となつて湧きあがる」

と、サマリヤの女に仰つた。そういうふうにして、キリストが、汲めども尽きない生命の水を私たちに与えてくださる。そんなふうに思います。

●求めの切なるにより

それからルカ伝11章、これは祈りのところです。「求めの切なるにより」ということが8節に出てきます。

「⁵また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、^{よなか}夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。⁶わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、⁷かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共に臥所^{ふしど}にあり、⁸起ちて与え難し」という事ありとも、⁸われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求めの切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。」(ルカ11:5-8)

「もう寝ているんだから、勘弁してよね」と。友だからからといって、起きて与えないけれども、うるさくてしょうがないから、

「求めの切なるにより、必要なものを与えるだろう」

と。この「求めの切なるにより」というのと、さきほどの不義なる裁判官の、「もううるさくてしょうがない。だから、しつこくでも聞いてくれるよ」というのが18章ですね。



「1 また彼らに、落胆せずして常に祈るべきことを、譬にて語り言い給う² 『或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。』³ その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたまえ」と言う。4 かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、⁵ 此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩まさん」と』⁶ 主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、⁷ まして神は夜昼よばわる選民のために、たとひ遅くとも遂に審き給わざらんや。⁸ 我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』(ルカ18・1〜8)

「気落ちせずして常に祈らないではいられない。これが祈りだ」ということを言われた。この不義なる裁判官は、もううるさくてしょうがないから、仕方なしに、この寡婦の訴えを聴いてやった。神さまはそんな不義な裁判官とはちがう。

「まして、神は夜昼呼ばわる選民のために、たとえ遅くとも遂に審き給わざらんや。速やかに審き給う。しかし、私が地上に再び現れるとき、地上に信仰は本当に残っているだろうか」

と言われた。ですから、この18章のところと今の11章がまた繋がっている。

それから33節、「身の灯火は眼なり」というところ。これはマタイ伝では山上の垂訓のところにもまとめられているのが、こんなところに出てきている。それから、食事の手を洗わないということ。それから、献金のこと。

●身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者

そして、今日の12章へ辿りつきましたので、これから12章を見ていこうと思います。

「1 その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスマズ弟子たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり。』² 蔽われたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬはなし。」

そうですね、今でも政治の世界でも何でも、隠していたものがどんどん現れてきます。安倍さんの奥さんがからんだという森友事件ですか、ああいう世界でもやはり次々、悪事露頭ということが出てきます。それをちゃんとキリストは言っておられる。

「蔽われたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬはなし」

と。こうやって全部、神さまはお見透しなんだよと。人間をごまかしても、神さまはごまかすことはできないんだからねと、そういうことを仰った。大事なことは次の4節です。これは私は大好きな言葉です。

4 我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。

この頃、殺人犯がいつぱいいます。19人を殺したとか、ちよつと変です。いろんな殺傷事



件があとをたちませぬ。けれども、彼らのできることは、肉体を殺すことまでしかできない。それ以上のことはできない。だから、そんな者どもを恐れるなど。では、誰を恐れるのか。

5 懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。

神さまです。神さまは肉体を滅ぼすことができるだけではなくて、靈魂をも地獄へ投げ込む、そういう権威をお持ちだ。それを懼れなさいと。やはり、人間というのは、そういう神さまの世界があるということを知らなければなりません。この世で悪事を働いて、それは人にはごまかしがきいても、神さまの前ではごまかしがきかない。たとえ自分の肉体が、仮に裁判で死刑の宣告を受けて、死刑で命を失っても、それですまない。靈魂というもの、靈魂が地獄へ落ちたら大変なんだ。だから、あの十字架の片一方の盜賊は、

「私はさんざん悪いことをしてきました。だから、こうやって十字架にかけられてるのは当たり前のことです。でも、あなたはちがいます。どういうご縁か、この私の最後の、この世で命を失う最期の時に、あなたという素晴らしいお方とご一緒できた。もうそれだけで充分です。御国にお入りになる時に、私のことを覚えてください」(ルカ23・40〜42)

と言った。イエスは、

「なんじ今日、我と共にパラダイス！」(ルカ23・43)

と言われた。だから、彼の魂はキリストに抱かれて天へ昇って行ったわけです。もう片一方の盜賊は、イエスをさんざん悪口言いましたから、ああいうのは地獄へ行くよりかしようがない。それをここにも、

「身を殺したるのち、それ以上のことをできない、そういう人間どもの仕打ちはどうでもいいんだ。殺したのち、地獄へ投げ込む権威あるお方、神さま、そのお方を懼れかしこみなさい」

と言っておられる。

われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。6 五羽の雀は二錢にて売るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。7 汝らの頭の髪までもみな数えらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。(ルカ12・1〜6)

と。「雀よりもはるかに素晴らしい」というようなことを仰いますと、これはマタイ伝の山上の垂訓のところに出ていますね。マタイ伝10章28節、

「28 身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを

これは人間たち、

懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。29 二羽の雀は一錢にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。30 汝らの頭の髪までも皆かぞえらる。31 この故におそるな、汝



らは多くの雀よりも優るなり。

多くの雀たちよりもあなた方は素晴らしい存在として神さまに顧みられているのだからと。そう仰ったのちに、

32 されど凡そ人の前にて我を言いあらわす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言い顕さん。33 されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。」(マタイ10：28～33)

当時は、イエスという方は世間では認められていませんから。特にパリサイ人とかそういう宗教家たちからは迫害され異端視される立場だったから、イエスを告白するということは大変なことだった。でも、それを恐れなくて告白するということは大事だと。

●自己紹介でキリストを告白する

今だったら、「自分はクリスチャンです」と言うのはそんなに恥ずかしいことではありません。でも、戦時中は大変だった。

「天皇が大事か、キリストが大事か、どっちなんだ！」

といつて、さんざん苦しめられたというのを聞いています。そういう時に躓かないで、はっきりとキリストを告白する。キリストは、

「そうでなければ、私も知らないと言っようよ」

と。だいたい、キリスト教の歴史は迫害の歴史が多い。「長崎の二十六聖人」というのもそうでしょう。いろいろ日本でも、徳川時代に迫害されました。それは徳川家からすれば、宣教師たちはキリスト教を手段にして日本を属国にするのではないかという心配をいだいたんですね、為政者としては。それでキリスト教を弾圧したという、ある面ではやむを得ない面もあつたでしょうけれども。本当に純粹に魂の救いだけをもたらしたならよかつたけれども、だいたい、中国でもどこでも、キリスト教の宣教を一方でやりながら、そこを自分たちの属国にしてしまうという面がありました。それは不幸な歴史だと思う。

まあそれはそれとしまして、今はそういった迫害は何もありません。憲法のもとで信教の自由というのが保証されています。そういうときだからこそ、我々は大胆にキリストを告白していかねければなりません。にもかかわらず、我々がもし、いろんなことを理由にして、キリストを人々の前で否んだら、

「キリストもあなた方のことは知らないと言っようよ」

という。信仰を告白するというのは、日本の社会ではとても難しいことだと私は思う。私をよく、学生とか新しい社会人になる人に言っようです。

「初めて、知らない所へ入って行って自己紹介する時に、そのときにはつきりとキリストを告白しておきなさい。そうしたら、あとが楽ですよ。途中から、『いつ告白しようか、いつ告白しよう?』とやっていたら、ついに機を逸しますよ」



と。「何で今まで黙っていたのか」と言われる。だから、一番初めに自己紹介の時に、「私は肉によれば……云々。しかし、霊によれば、イエス・キリストによって新たに生まれたもの、キリスト者です」

ということをはつきり告白する。そうすると、いろんな人がその後、尋ねてきます。

「あなたは、カトリックですか、プロテスタントですか？」

「いえ、どつちでもありません」

「では、無教会か？」

「いえ、無教会でもない」

「それでは何か？」

「キリスト直結です」

「どうして、そうなったのか？」

「小池辰雄というのがいまして、それから奥田昌道というのが出てきまして、それで今、こういう形でやっているんですよ」

と。まあそういうことで、いろいろ話のきっかけができてあがるんです、初めに自己紹介をやっておきますと。それをやらなかったら、チャンス逸する。そういうことで、皆さん、ぜひ新しい所で自己紹介をする時には、

「肉によれば……。しかし霊によればキリストに属するもの……」

なんて(笑)、パウロ式にやってくださいね。

キリストを告白することによって波瀾万丈になる。まず家庭のほうで分裂が起こる。大體、日本は仏教の家庭が多いですから、そこでキリスト者が出てくると、まず仏壇を拜まなくなり。それで、「不孝者！」といつて、そこで喧嘩が起こる。お墓の問題があります。いろいろそういった、仏壇、お墓、祖先の祀り、そんなことで、家族の中から一人キリスト者が生まれますと、そこで分裂が起こります。そこで妥協してはならない。特にお嫁さんというのは気の毒ですよ。昔流にいいますと、旦那の家に入るといって、家の格式に従わなければならない。家のしきたりに従わなければならない。現代だってそうですよ。

天皇家に入る人は気の毒だと思う。天皇家のしきたりに従わなければならない。だから、美智子さんは大変だったと思うんですね、カトリックの方かたでしょ。曾野綾子さんというお友だちがいて、ずいぶんいろいろアドバイスなさったと私は思いますけれども。

そういう天皇家に入ると、天皇の祖先を拜むということ、従わなければならない。しかも、片一方では、自分はクリスチャンであるという、その立場を貫かなければならない。だから、宗教的にも、それから夫婦という面では夫をたてるという役割があります。そういう非常に板挟みの中で苦しい生活をなさったのではないか。だから、一時的に非常に精神的に辛い立場になられたこともありましたね。そういうことをどれだけの人がちやんとわかってあげているか。私は大変なご苦労だったと思います。



しかし、あの天皇家のしきたりに従わないということは、始めっから天皇家に入らないという決断を求められたはずなんです。入った以上はやはり従わなければならない。その板挟みの苦しみがあったらどうなと思います。

では、現在の天皇はどうなのかと。雅子さんですね。元外交官でしょ。だから、トランプ「ドナルド・トランプ。2016〜2019年、アメリカ合衆国大統領」が来ようと何が来ようと、英語でペラペラ自分でもしゃべるから、あれは強いですね。けれども、天皇家の中で大変だろうなと私は思う。「私は雅子を守ります」と、皇太子時代に約束された。そういうドラマがこれから始まっていくんですよ、令和の時代は。まあそういう私は見方をしております。

●水一杯にても与つる者

キリストはここで、「分裂が起こる」と言う。しかし、分裂が起こった時に妥協してはならない。

「³⁴われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず、^{かえ}反つて^{つるぎ}剣を投ぜん為に来れり。³⁵それ我が来れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその^{しゅうとめ}姑より分かつたん為なり。³⁶人の^{あだ}仇はその家の者なるべし。³⁷我よりも父または母を愛する者は、我に^{ふさわ}相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。³⁸又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。³⁹生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失う者はこれを得べし。」(ルカ12・34〜39)

「自分の命、この世の命を惜しむあまり、十字架を、キリストを捨てるようなことでは本当の生命は得られない。私のために命を失う、そういう人は本当の生命をいただくんだよ」

と仰つた。それからもうひとつ、うれしいことを言っています。

「⁴²凡^{おほ}そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に^{ひや}冷かなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし」(ルカ12・42)

あなた方クリスチャンたちを受け入れて、冷やかな水を一杯飲ましてくれる者は——私流にいうと、重い荷物を持って苦しんでいそうな、この年寄りを顧みてくれた者は——天国で必ずその報いを受けると、ちゃんと約束されている。私に親切にしてくれた人は、私がクリスチャンだからやってくれたはずはないと思う。そんなことはわかりませんから。けれども、哀れな老人がおると思つて、近よつてきて重い荷物を担いでくれた。それは必ずその報いを受けるよと、そういうことを約束なさっています。

ですから、人に親切にすることは非常に大切なことなんです。人が苦しんでいるのを見て、同情して、何とか手をさしのべる。「同情」というのはドイツ語で「ミットライト」(Mitleid)という。「ライト」というのは苦しみで、「ミット」というのは「共に」なんです。「人と苦



しみを共にする」というのが「同情」という日本語で訳されている。痛みを共にする、分かちあう。これが社会を築いていくうえで一番、基礎ではないか。家庭におきましても、およそ人の集まる所でお互いに痛みを分かちあう、担いあう、そこから始まってくるように思う。また、一人が非常に素晴らしいことがあれば、それをまた皆さんの喜びとする。これはもつと素晴らしいかもしれませんが、もつともつと底辺にあるのは、痛みを分かち合うという憐れみの気持ちだと思う。

「善きサマリヤ人」の譬え話もそうでしょ。強盗に襲われて半死半生で苦しんでいる。そういう倒れた人を見て、宗教家は遠くを通って行った。隣人となりびとには親切にしなければならぬ。でも隣人でなければ放っておけばいい。だから、隣人にならないためにわざと遠くの路を通って行った。これが宗教家です。それに対して、

サマリヤ人は近づいて行って、そして傷の手当をし、旅館へ連れて行って、そして旅館の主人に介抱を頼んで、

「私はこれから旅立って行くけれども、帰りにまた寄るから、それまでの間、この人を面倒みてやってね」

と言って、デナリ二つを置いて行ったという。それに対して、

「誰がこの人の隣人となったと、あなたは思うか」

とパリサイ人に聞かれた。

「はい、親切なことをしたそのサマリヤの人です」

「だったら、あなた方も同じようにしなさい」(ルカ10・30〜37)

とキリストは言われた。キリストの仰っていることは非常にわかりやすい。ゴタゴタ言っておられない。でも、そこに本当に隠された奥義があるように思います。それがこの42節に、

「42 凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし」(マタイ10・42)

と、これがマタイ伝の10章でした。

それからまたルカ伝の12章にもどります。12章で皆さんにとって大事なことは、人の前で告白しなさいということ。

「8 われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言いあらわす者を、人の子もまた神の使つかいたちの前にて言いあらわさん。9 されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否いなまれん。」

しかも、非常に大事なことを言われました。

10 凡そ言ことばをもて人の子に逆う者は赦されん。されど聖霊を瀆けがすものは赦されじ。

「言葉で私に逆らう者は赦される。しかしながら、聖霊を瀆すものは赦されない」

と。いかにイエスが聖霊という、神さまから来ている霊を尊ばれたか。ナザレのイエスは、



聖霊がうちに宿っていらつしやるにしても、聖霊は別人格なんです。天に行かれてからは、イエスは聖霊の姿で私たちの中に宿ってください。 「助け主、真理の御霊」です。ヨハネ伝14章から16章に出てきます。けれども、生きていらつしやる時のイエスという方にとっては、聖霊は自分の外にいらつしやる別なる霊。これは神さまからの聖き霊だから、

「人間イエスをぼろくそに言ってもいいよ。けれども、聖霊をけがす罪は赦されない」

とはつきり言っておられます。それがここです。

それから、キリストを告白する時にみんな勇氣がいる。その時に大胆に告白すれば、

「どういふふうに弁明するかは全部、聖霊が教えてくださるから」

という。これも大事なことです。人の前にキリストを告白する時に怖じ気づくことはないよと。天にいらつしやる父なる神、そしてまたキリストは放っておかれない。そうでしょう。自分の子供が人々の前で証する時に、

「ああもう、乗り移って助けよう」

となさるわけです。よく、「子どもの喧嘩に親が出てくるな」といいますけれども、子どもが人々の前で告白するのにドギマギして、しどろもどろでいたら、「さあ、助けに行こう」というので、聖霊が来て助けてくださる。そういうお気持ちだと思う。

11人なんじらを会堂、或は司、あるいは権威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答え、または何を言わんと思ひ煩うな。12聖霊そのとき言うべきこと

とを教え給わん (ルカ12・8〜12)

と、ちゃんと書いてありますね。

●宝を天に積み

それから次はおもしろいことが書いてあります。これはルカ伝にしか出てこない。

「13群衆のうちの或人いう『師よ、わが兄弟に命じて、嗣業を我に分かたしめ給え』14之に言いたもう『人よ、誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ』」

まず出だしが、キリストをつかまえて、

「遺産分割をやってください」

と。キリストは、

「私は遺産分割人でない」

と。今でいうと、家庭裁判所です。調停とか何とかで、相続争いだの、すごいんですね。相続争いというのは。今まで仲よかつたものが喧嘩する。全然知らなかつたやつが、知らん間に現れてきて、「自分も相続人です」と言って、相続の分割に加わってくるのか。仲よかつた兄弟たちの中で分裂がおこり、知らなかつた親族が現れてきて、遺産分割でまた争



いになる。これが世の常なんです。当時も、イエスに対して、「どうぞなんとか、調停をお願いします」とやって来た。

「自分は調停人ではない」

と言って断っておられる。それがこの箇所ですね。そして、

15 かくて人々に言いたもう 『**慎みて凡ての慳貪をふせば、人の生命は所有の豊かなるには因らぬなり**』

と。トランプさんというのは、たしかに大金持ちなんです。アメリカでは1%の大金持ちがアメリカの富の大部分を占めているとか聞く。向こうは極端なんです。そのかわり、カーネギーとか、大金持ちはみなそれを世の中のために差し出した。寄付するんです。寄付の文化が育っている。

戦後、日本の学者がたくさんアメリカに留学しました。フルブライト留学生とか、それは全部そういった大金持ちが資金を出して、日本の留学生を招いている。私はドイツのほうに行っただけでも。そういうことで、向こうは金持ち社会だけれども、本当の金持ちは、自分のお金を社会に還元するという、それがひとつの美德で誇りであったと思う。

今はどうなっているか知りません。今は貧富の差がひどくて、しかも向こうは移民の社会ですから非常に複雑で、広すぎて、大変な社会だと思えますね。

「人の生命は**所有の豊かなるには因らぬなり**」

と。それから、大金持ちの話が出てくる。

16 また譬を語りて言い給う 『ある富める人、その畑豊かに実りたれば、¹⁷ 心の中に議りて言う「われ如何にせん、我が作物を蔵めおく処なし」¹⁸ 遂に言う「われ斯く為さん、わが倉を毀ち、更に大なるものを建てて、其処にわが穀物および善き物をことごとく蔵めん。¹⁹ かくてわが靈魂に言わん、靈魂よ、多年を過ごすに足る多くの善き物を貯えたれば、安んぜよ、飲食せよ、楽しめよ』

大豊作があつて、

「さあ困つた、どうしよう。そうだ、でっかい蔵を立てよう。収穫物を全部、そこへしまいこむ。そうすれば、もう一生分、自分は左うちわで生きていくことができる」

と言って、彼は喜んだ。私だったら、どう答えるか。

「左うちわはあかん。肥満になって糖尿病で死んでしまう。だから、貧しい者に施しなさい」

と、私ならそう言う。イエスはもつとひどいことを言うでしょ。

「今晚、お前の命はなくなるよ」

と言われた。イエスは残酷でしょ。私のほうがまだよっぽどましですよ。お金持ちで左う



ちわは、肥満で糖尿病というのは統計的に証明されている。だから、あなた、皇居の周りを走りましょう。そして、そのあなたの穀物をみんなに分かち与えて——昔、ヨセフがやった。エジプトの宰相になって、飢饉が続いたときに、それまでにたくさん貯えて、それをみんな民衆に分かち与えた——それと同じように、それをやりましょうよと。私なら、せいぜいそのくらいだけでも、イエスはもつとひどいよね。この人が、

「魂よ、長年も過ぐすに足る善き収穫物を貯えた。さあ、左うちわで安んぜよ、飲み食いせよ、楽しめよ、おらが春だ」

とこう言っている。

20 然るに神かれに「愚なる者よ、今宵なんじの靈魂とらるべし、さらば汝の備えたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言い給えり。21 己のために財を貯え、

神に対して富まぬ者は斯くのごとし』(ルカ12・13～21)

「己のために財を貯え、神に対して宝を持たない者はこういう姿だ」ということを言われた。これに相当するところは、マタイ伝でいいますと、あの山上の垂訓の所に出てくる。そことちよつと比較してみましよう。マタイ伝6章19節から、

「19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは蟲と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり」(マタイ6・19)

と。ルカ伝をもう一度みますと、

「己のために財を貯え、神に対して富まぬ者は、この愚かな豊作で喜んでいてこの人のような姿だよ」

と仰る。マタイ伝では、

「己のために宝を地に積むな。自分のためにというならば天に積みなさい」

と。まあ「己がために」と言っている。

「自分のために積むのはわるくない。しかし、積む場所は地上ではまずい、天に積みなさい。あそこは盗人が来ないから」

と。そして、

「21 なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし」(マタイ6・21)

と。これですね。皆さん、宝はどこにありますか。株をやっている方は、新聞を見たら、株の値動きにまず朝、目がいくそうですよ。皆さんの中にはそういう方はいらつしやらない? だいたい、株を持つというのは金持ちがすることですよ。私の知っている方でそういう方がいらつしやいまして、もう毎朝そういうことに非常に熱心だったというのを聞いていました。私はお気の毒だなと思いました。

「20 なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは蟲と錆とが損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21 なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし」(マタイ6・20～21)



「宝を天に積み」と。そして「宝のある所に心もあるだろう」と。そうなんです、あなたの宝は何ですか。あなたの宝はどこにありますか。宝のある所に心もある。だから、その宝は見える物ではなくて、見えないもの。たとえば、人にたくさんした親切とか、いろいろなそういった人に対する愛の行い、それは全部、天に貯金されている。それが終りの日になったら、ちゃんとそれに対する報いが与えられるという、それがマタイ伝26章に、羊と山羊に分けて、羊に対してのご褒美、山羊に対しての審き、それが26章のところに出てきます。それから、

「^{ともしび}22身の燈火は目なり。

と。これもルカ伝できつきましたね。

この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。²³されど汝の目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。²⁴人は二人の主に兼ね事うることを能わず、或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うることを能わず」(マタイ6・22〜24)

つまり、神と富、その両方を両立させることはできない。神と富の二刀流はだめですよと。

「そしたら、どうしたらいいのですか。富がなければ生きていけないではないですか。ある程度の蓄えがなかったら、この世で生きていくことはできませんよ」

「まあそれはもつともだけれども、それはあなたが^{おもんばか}慮ることではない。あなたのためにご心配してくださる方がいらつしやるのだから」

と。「異邦人」という言葉が出てきます、ルカ伝でもマタイ伝でも。異邦人とは何か。「神さまを知らない人」を異邦人といいます。何も国籍がイスラエルか、イスラエルでないか、そういうことではない。異邦人とは、神を知らない人たち。これが神さまの目からみたら異邦人。神さまを知っている人は、国籍が何であろうと、神の民、天国人です。

●まず神の国と神の義を

天国人は、神さまがすべてご心配くださるから、まず求めるべきは、

「まず、神の国と神の義とを求めよ」(マタイ6・33)

と。マタイ伝6章33節。

「まず、神の国と神の義を求めなさい」

と。神の国と神の義、これはキリストをいただいた我々からすれば、

「キリストを求める」

ことなんです。キリストご自身が神の国であり、神の義なんです。そういうふう読み替えてください。だから、

「まず、私(キリスト)を求めてきなさい。そうしたら、必要なものは全部、私が責



任をもつてあなたのために提供するから。まず求めるべきは私だよ。私があなたに何を願っているか、私の思いは何であるか。それを大事にしなさい。そうすれば、あなたの生活は正しくなるから」

と。それがこのマタイ伝6章25節からのところですよ。まずマタイ伝を読んでみますと、

「²⁵この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命の^{いのち}ことを思い煩い、何を著^きんと体^{からだ}のことを思い煩うな。生命は糧^{かて}にまさり、体は衣^{まさ}に勝るならずや。

²⁶空の鳥を見よ、播^まかず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙^{はる}かに優^{すぐ}る者ならずや。²⁷汝らの中たれか思い煩いて身の長^{たけ}一尺を加え得んや。²⁸又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡^よがざるなり。²⁹されど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装^{よそおい}この花の一つにも及^しかざりき。³⁰今日ありて明日^{あした}に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装^{よそお}い給えば、まして汝らをや、ああ信仰^{まこと}うすき者よ。³¹さらば何を食い、何を飲み、何を著^きんとて思い煩うな。

この「何を着ようか」ということで申し上げますと、皆さん、パーティに行かれるときに、「二十着ほどあるうちからどれにしようか」

なんて、そうじゃないんですよ。明日着るものがない人たちに向かつて言っている。もうボロボロのボロしか持つてないそういう人たちに対して、「心配いらんよ」ということを仰った。そこを間違わないでください。

³²是^{これ}みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡^{すべ}てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³³まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。³⁴この故に明日のことを思い煩うな、

明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。」(マタイ 6・25〜34)

その日の食にもこと欠く人、明日の着るものにも困っている人。それは異邦人なら——つまり神さまを知らない人なら——そのために心を砕くだろう。しかしながら、あなた方はそうじゃない。天の父なる神さまはすべて、あなた方に必要なもの、体を養い命を養うものは何であるかはちゃんとご存知である。食べ物のこと、着るもの、すべてご存知である。だっただとしたら、あなた方がまず第一に求めるべきものは「神の国と神の義」、今ふうというならば、キリストご自身。キリストご自身の中に神の国はあります。キリストご自身が神の義です。ですから、「まず神の国と神の義を」と書いてあれば、それは、

「まず私(キリスト)を求めてきなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる。だから、明日のことは思い煩わなくていい。明日は明日自身が思い煩うだろう。一日の苦勞は一日で充分だ」



と。私はこの言葉に触れたとき、何と慰め深い、ありがたい言葉かなと思った。本当に感激、感動、感謝でした。キリストを知らなければ、とてもこんな心境にはなれなかった。すべては自己責任で、自分が、しかも自分だけではなく、自分の家族も、自分にぶらさがっているいろんな人たちのことも全部、自分が背負わなければならないと思っておりました。しかし、それだけの力がない、財力がない。何もないくせに、責任だけは人一倍背負っていた、そういう私だったんです。それで潰れていたときに救われた。この御言にぶつかった。「そうだ。責任を持つてくださる方がいらっしやるんだ。お前のすることは、キリストをひとすじに求めていく、キリストの御意だけを求めていく、それに徹していけば、お前が背負っていた荷物、責任を全部、イエスさまが引き受けてくださる。大丈夫だよ」

と。つまり、荷物を全部、キリストに預けたんです。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじを休ません」(マタイ

11・29)

と、あのマタイ伝11章29節に出てくるでしょ。

●わが子イエスよ、ぶつぶつ言っんじやない

その前にイエスはこういうことを言っておられるか、20節を見ましよう。

「20 爰にイエス多くの能力ある業を行い給える町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給う、21 『禍害なる哉コラジンよ、禍害なる哉ベツサイダよ、汝らの中にて行いたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行いしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。22 されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐え易からん。23 カペナウムよ、なんじは天にまで挙げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行いたる能力ある業を、ソドムにて行いしならば、今日までもかの町は遺りしならん。24 されば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐え易からん』」

(マタイ11・20～24)

「ツロとシドン」というのは、硫黄が降ってきて滅びた町です。ところが、あなた方は素晴らしい御業を見ていながら、全然、それに対して悔い改めもしなかったではないかと言って、力ある業を行い給える町々が悔い改めないで、それを叱責し始められた。イエスはそういった不信仰な人たちを叱責なさったあと、突然、25節で、

「25 その時イエス答えて、言いたもう

と。これは新共同訳では、こういう言葉ではないけれども——他のドイツ語や英文をみてもそうでないけれども——ここだけは、「答えて」と書いてある。なぜなのかわかりません。けれども、小池先生はここをとらえて、



『その時イエス答えて、言いたもう』とは、何に答えたんですか?」

とはつきり仰つた。「答えて」というのは、何かの呼びかけに答えているはずでしょ。そこを小池先生はつかまえて言われた。イエスは今まで人々を叱責しておられた、「コラジンよ、ベツサイダよ」と。ところが、天から慰めの御声みこゑが聞こえてきた。

「わが子イエスよ、ぶつぶつ言うんじゃないよ。わしはわかっているんだから、大丈夫だよ」

と。まあそういう慰めのみ声が天から聞こえてきた。その天からの慰めのみ声に対して、

「答えて言いたもう『**天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智かしこき者みどりこ慧さとき者みどりこにかくして、**嬰兒みどりこに躪あらわし給えり。**』²⁶父よ、然しかり、かくの如ごときは御意みこころにかな適あえるなり。²⁷すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外ほかになし。父をしる者は子または子の欲するままに躪すところの者の外になし。」**

「あつ、そうでした。ありがとうございます。感謝いたします。奥義を、この世の知恵ある者、賢い者、大金持ち、パリサイ人、そういうご連中ではなくて、**嬰兒みどりこに――つまり赤ちゃんです――**嬰兒みどりこに躪あらわわしてくださった。これこそ御意みこころでございました。子を知る者は父のほかにはいらつしやいません。父を知る者は私と、また私が示してあげる**幼児みどりこたち**のほかにはありません」

と、そういうふう感謝の祈りをささげて、それから、

²⁸凡たゞて勞あする者・重荷おもを負おう者、われきたに來きれ、われ汝きみらを休やすません。²⁹我われは柔な和なにして心卑ひくければ、我われが軛くびきを負おいて我われに学まなべ、さらば靈魂たましひに休やす息みを得えん。

³⁰わが軛くびきは易やすく、わが荷おもは軽かろければなり』(マタイ11・25〜30)

と、こう続いていく。ですから、ここはすごく深い。一方では、イエスは自分が一生懸命に御意に従って働いてきた。「骨折り損のくたびれ儲け」といいます。全然、悔改めもしない。もう、けしからんと、怒っておられるわけです。それに対して、

「そう怒るのではないよ。わたしはお前のことをわかっているから」

と、天から慰めの言葉が臨んできた。そこでイエスはその慰めのお言葉、み声に答えて、「あつ、そうでした。こういう私を受け入れないご連中ではなくて、あなたは**嬰兒みどりこ**、乳飲ちちのみみ子、そういった本当に幼子おきなごたちに、**靈の幼子**たち、そういう者に**み**国の奥義を躪あらわわそうとしてください。そうでした。もうブツブツ言うのはやめます」

と言って、非常に慰めをお受けになった。そこから一転して、今度は28節に続く。だから、27節でいっぺん切れていると思う。

「ありがとうございます。本当にブーブー言っていましたけど、よくわかりました。ありがとうございます」



と、こう言つて、感謝の祈りを捧げて、それから今度は、

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ」

と、こういうふうが続いている。そうしたら、何か納得でしょ、皆さん。

「ああそうか、イエスさまだつて、ブーブー言われたことがあつたんだ」

と。皆さんもいろいろ世の中で、世のため人のために働かれて善意でなさつても、一向に受けいれられなくて、

「もう迷惑なはなしだ、放つておいてよ」

なんて言われて、特にボランティア活動をなさつたり、いろいろお年寄りのお世話をなさつたりとか、老人ホームに行かれたりとか、そういう時は、いいことばかりではなくて、介護者が非常に今、介護される方によつて傷つけられているということをよくテレビなんかで見ます。そういう人たちに対して、こういう慰めのみ声が臨んでいると、そう受けとつてほしい。すべて労する者、重荷を負う者は——介護老人ホームで働く人は、労する者は重荷を負う——自分のためにはない、人のために肉体を犠牲にして、精神を犠牲にして、面倒をみていらつしやるわけですね。

「そういう労する者、重荷を負う者、そういう人は私の所にきなさい。私はあなた方の気持ちをわかつているよ。自分もさんざん苦しんだよ。苦しんだ時に神さまからの慰めがあつたんだよ。だから今度は、その慰めをあなた方にお分かちするから。そして、私は柔和にして心ひくければ、我が軛くびきを負いて我に学べ。私が一緒に重荷を負うから二人三脚で行こう。そうしたら、あなたの靈魂に休息が与えられる。それが何より大事なことだ。私の荷物は負いやすい、荷物は軽いんだよ」と。こういうふうにして、皆さんがこの世の中で、社会の中で、家庭の中で、いろんな苦しみを味わう時、荷物を背負う時、そういう時に誰も理解してくれない。むしろ逆に、

「へたくそだね、もつとこうだよ」

とボロクソに言われる。それに対して我慢している。そういうやりきれない気持ちになつた時に、こういうところへ来てくだされば、

「あつそうだ。イエスさまもさんざんそうやって苦しみを味わわれた。神さまからの慰めがきた。そのときにこんな素晴らしい祈りをなさつた。だつたら、自分たちだつて当たり前だよ。何よりもイエスさまが、私という人間の罪を贖い、罪と審きを全部引き受けて、もう私を活ける霊としてくださった。たとえ、肉体ではなおこれからもいろいろ苦しいことがあるかもしれないけれども、「肉体を滅ぼしても魂を滅ぼすことのできないものを恐れるな」

と、ちゃんとイエスは仰つている。

「もう私は完全に天国人にされてしまつている。だから、御名を讃えて進むんだ。それをイエスは喜んでくださる」



と。そんなふうにして、ここの御言を自分の生活の中での活力源として受けとっていく。そういう読み方をなさってほしいなと思います。

●明日のことを思い煩うな

それからまたルカ伝12章のほうへもどりますと、22節から仰ったことは、マタイ伝ではさつきの6章25節からの、

「明日のことを思い煩うな」(マタイ6・34)
 と言われたことが、ルカ伝ではこんな所に出てきているわけです。

「22また弟子たちに言い給う『この故にわれ汝らに告ぐ、何を食わんと生命の
 ことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。23生命は糧にまさり、
 体は衣に勝るなり。』」

マタイ伝では「空の鳥を見よ」と書いてあるのは、ここは「鳥」になっ

ていますね。
 24 鴉を思い見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いた
 もう、汝ら鳥に優るること幾許ぞや。25 汝らの中たれか思い煩いて、身の長
 一尺を加え得んや。26 されば最小き事すら能わぬに、何ぞ他のことを思い
 煩うか。27 百合を思い見よ、紡がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、
 栄華を極めたるソロモンだに、其の服装この花の一つにも及かざりき。28 今
 日ありて、明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装い給えば、況て
 汝らをや、ああ信仰うすき者よ、29 なんじら何を食い何を飲まん

と求むな、
 また心を動かすな。30 是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は、
 此等の物のなんじらに必要なるを知り給え

ばなり。
 「世の異邦人」とあるでしょ。つまり、神さまを知らない人を世の異邦人と言ってます。神
 さまを知っているあなた方はもう異邦人ではない、天国人だよと。そういうことですから、
 この「世の異邦人」という言い方を差別用語と受けとらないでください。神を知らない人
 たちは異邦人。神を知って神の子であるあなた方は天国人です。「その天国人であるあなた
 方がいろんなことを心配したらどうするのか」と、そう言っておられる。必要なことは何か。

31 ただ父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんじらに加えられるべし」(ル
 カ12・22〜31)

と。マタイ伝では、

「まず神の国と神の義を求めよ」(マタイ6・33)
 といつて、厳かでしょ。こころは、

「ただ父の御国を求めよ」(ルカ12・31)

と、なんと簡単でしょう。そういうところに、莊重なるマタイ伝と非常に庶民的なルカ伝
 のちがいがよく出ている。おそらくキリストはルカ伝的に仰っているのではないかと思う。



あとの人たちが荘重なる響きのマタイ伝を編集して、あそこへキリストの言葉を集めてきた。そういうふうにあります。なにもマタイ伝を非難するわけではない。マタイ伝はマタイ伝の意図をもって編集されている。しかしながら、真実に近いすがたはルカ伝だろうなと思う。日常生活の中に入りこんできて、イエスは場面場面でいろんなことを仰っているわけです。だから、非常に日常生活に近い形でキリストはお話をなさっている。そういうふうに思います。

「³² 32 懼るな、小き群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。

³³ 33 汝らの所有を売って施済をなせ。己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ

財宝を天に貯えよ。かしこは盗人も近づかず、蟲も壊らぬなり、³⁴ 汝らの財

宝のある所には、汝らの心もあるべし。」(ルカ12：32～34)

これはマタイ伝と一緒にですね、

「宝のある所には心もある」(マタイ6：21)

という。

●寝ずに主人を待つ僕

それから次は、イエスが突然やってくるという再臨のキリストを待つ話が出てきます。いつキリストがいらつしやるかわからない。それを例え話で、ちょうど、婚姻の席に招かれた主人が出かけて行って、その婚宴が延々と続く。徹夜の婚宴もある。でも夜明け方に突如と主人が帰ってくる。その時に寝ずの番をして、ちゃんと用意している僕たちは祝福されるといってお話なんです。

「³⁵ 35 なんじら腰に帯し、燈火をともし居れ。³⁶ 36 主人、婚筵より帰り来りて戸

を叩かば、直ちに開くために待つ人のごとくなれ。³⁷ 37 主人の来るとき、目を

覚ましおるを見らるる僕どもは幸福なるかな。われ誠に汝らに告ぐ、主人帯

して其の僕どもを食事の席に就かせ、進みて給仕すべし。³⁸ 38 主人、夜の半ご

ろ若くは夜の明くる頃に来るとも、かくの如くなるを見らるる僕どもは幸福

なり。³⁹ 39 なんじら之を知れ、家主もし盗人いずれの時来るかを知らば、その

家を穿たすまじ。⁴⁰ 40 汝らも備えおれ。人の子は思わぬ時に来ればなり』

大事なのは40節です。

「あなた方も心の備えをしていなさい。思わぬ時に私はやってくるよ」

と。これは再臨のキリストです。キリストが再び来たりたもう。これは使徒行伝に出てきます。そのことを先取りして、こんなところで仰っています。

それから、主人がいつ来るかわからないから、ドンチャン騒ぎをやっている。突然、主人がやってくる。そういう時に、ドンチャンしている僕というのは非常にこつぴどく叱られるよ、ということが次に書かれています。



41 ペテロ言う 『主よ、この譬を言い給うは我らにか、また凡ての人にか』
42 主いい給う 『主人が時に及びて僕どもに定の糧を与えさする為に、その僕
どもの上に立つる忠実にして慧き支配人は誰なるか、43 主人のきたる時、か
く為し居るを見らるる僕は幸福なるかな。44 われ実をもて汝らに告ぐ、主人
すべての所有を彼に掌とらすべし。45 若しその僕、心のうちに、主人の来る
は遅しと思ひ、僕・婢女をたたき、飲み食いして酔い始めなば、46 その僕の
主人、おもわぬ日知らぬ時に来りて、之を烈しく答うち、その報を不忠者と
同じうせん。47 主人の意を知りながら用意せず、又その意に従わぬ僕は、答
うたるること多からん。

それからちよつと困ったことがある。48節の後半です。こんなのはひどいじゃないのと。

48 されど知らずして打たるべき事をなす者は、答うたるること少からん。多
く与えらるる者は、多く求められん。多く人に托くれば、更に多くその人よ
り請い求むべし。」(ルカ12・35〜48)

「多く与えられる者は、多く求められる。多く人に預けているから、更に多くその
人より請い求められる」

と。神さまは人を見て、いろんな賜物をくださる。

「こいつはものになる」

と思つたら、たくさんタラントを下さる。ところが、そのタラントを活かさないで放つ
ておいたら、こつぴどくやられる。使ひものにならないやつには、始めから神さまは与え
られない。

プロ野球でもそうです。ドラフト会議で「こいつはものになる」と思つたら、それを多
くの契約金で召しかかえて鍛え上げて、一軍選手として働かそうとしているわけですよ。
スポーツの世界でもそうですよ。多く与えられる者は多く求められる。始めからものにな
らないやつには与えられない。そういう世界のようにです。この福音の世界でも、

「これは私の弟子としてものになる」

と思つたら、いろんなものを与えられる。その代わり、多く求められる。それはたとえば、
ヨハネ伝3章を見てごらん。31節から。私は、とんでもない所と結びつけるから、おもし
ろいでしょ。

「31 上より来るものは凡ての物の上であり、地より出づるものは地の者にして、

その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上であり。32 彼

その見しところ聞きしところを証たもうに、誰もその証を受けず。33 その証

を受くる者は、印して神を真なりとす。

「上からやって来たもの」、これはイエスご自分のことを仰っています。それから、聖霊をい
ただいた者、つまり、新しく生まれた者です。



「肉から生まれた者は肉である。霊から生まれる者は霊だ」(ヨハネ3・6)とありましたね。霊による新しい誕生をした、聖霊の器。そのことがここに出てくる。イエスは天より来たる方。地上にあつた我々は聖霊によって新しく生まれ変わらされた者です。その姿がここにあります。

それが今度は、「神の遣わし給いし者」になつてゐるわけです。今度は地上では、我々はキリストの十二弟子みたいにこの世に遣わされてゐるんです。「遣わされる」ということは、それだけの力をいただかなければ遣わされない。言葉をいただかなければなりません。何よりも霊をいただかなければなりません。ここに、

34 神の遣わし給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。

とあるでしょ。これはイエスご自身のことだけれども、我々もイエスの弟子としてこの世に遣わされる以上は、この覚悟を受けとつていかなければいけませんよ、皆さん。

「神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり」

「はい、イエスキさま。私はあなたから遣わされました。だから、ここに書いてある通りの御霊、御言をください。そして、私が語る言葉はいわゆる人間の言葉ではなくて、霊の言葉を語らしててください」

そうやって、世に遣わされた者として社会に出ていく。これが証人なんです。皆さん、証人というのはそういう自覚を持つていただきたいんです。

35 父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。36 御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。」

(ヨハネ3・31〜36)

そういうことがヨハネ伝にちゃんと出てきます。ですから、ヨハネ伝であろうと、ルカ伝であろうと、霊の次元のこととなつたら全部、繋がつてゐるんです。地上のことにおいてはバラバラかもしれません。でも、霊の次元、そのことが語られてゐるときは、イエスの言葉も弟子たちの言葉もすべてちゃんと繋がつてゐますから。それを霊の次元でつかまえていく。そういうふうには読まなければなりません。

● 私たちが新しく生まれなければ

そのためには私たち自身が新しく生まれなければならぬ。「いえ、生まれることができるとしていいですか？」と。皆さん、どうでしょう？ できなかつたらウソですよ、十字架で片付けられたから。それをしつかり受けとることです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」(ガラテヤ 2・20)

と。ガラテヤ書2章20節にあります。肉なる我は今もなお昔のまま居るかもしれない。けれども、肉なる自分の奥にちゃんと霊なる御霊の新しい我が宿つてゐる。



「それが本当のあなただよ、本当の私だよ」

と。そういう受けとり方をしていかなければならない。それが小池先生が言われた、

「人間小池を見るな。御霊の小池を見てくれ。人間小池は死にいたるまで罪びとだ。けれども、その奥にある御霊の小池を見てほしい」

と言われた。その本当の仰りたかったことはそれだろうと思う。それは皆さんお一人お一人がそうなんですね。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、聖霊のキリストわがうちに在りて生き給うなり。われ今肉体にありて生くるは、わがために己が生命を捨て給いし御子イエス・キリストを信するに
よりて生くるなり」(ガラテヤ2・20～21)

ガラテヤ書2章20～21節、これは絶対に覚えておいてください。それと、コロサイ書3章1～3節です。おそらくそんなことを言う人は今までいなかっただと思えますね、私はこの福音集会にずっと集つどっていて。

「汝等もしキリストと共に甦おこえらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼か処しこに在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念おもい、地に在るものを念おもうな、³汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」(コロサイ3・1～4)

ここも私は少し意識をします。

「あなた方はもう既にキリストと一緒に甦おこったのだろ。だったら、上なるものを求める。キリストさまは天界におられて神の右に坐していたもう。既にキリストと一緒に甦おこった、そういう霊的存在であるあなた方は、上にあるもの、天にあるもの、天の次元にあるものを求めるのは当然のことであって、地にあるものを思うことはありえない。何となれば、あなた方はもう地上では死んだもの、あなたの本当の生命はキリストと一緒に神さまの中に隠されている。天の次元に隠されている。そして、あなたの本当の生命である御霊のキリスト、霊界のキリスト、天にあるキリストさまが現れてくださる時、あなたも同じ栄光の姿で現れてくるんだよ」

と。そういうことを、皆さん、お読みになつて——ブルブルブルツと「サカナ君」ではないけれども——「うれしい、万歳！」と叫ばなければ、読んでないですよ。聖書の言葉はみんなあなたの方のために書かれている。私のために書かれている、

「あなたの本質はこれだよ」

と。世の中の人はあなたの外側しか見てくれない。

「ああ、年取ったな、やっぱり奥田君も年取ったな、背中も曲がったしな」
と、それしか見てくれない。でも、御霊の主さまはわがうちに宿って、



「あれは背中には曲がっているかもしれないけれども、御霊の奥田は輝いているんだ」と言ってくたさる。

「見えるものではなくて、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的にして、見えないものは永遠に続くんだよ」

と、ちゃんとコリント後書4章に書いてある。そういうふうには物事を見ていく。パウロはここで自分のことを語っている。

「7我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。8われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、9責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。」(コリント後4・7～10)

「われ土の器に宝を持てり」と。「宝のある所に心もある」とありましたが、その宝は土の器の中に私は持っている。これは御霊のことですね。

「このお方がいらっしやるから、責められてもびくともしない。倒されても滅びず、イエスの死を常に身に負いながら、その生命はあなたの方の中に顕れていくんだから」と。

と、盛んなることを言いまして、16節から、

「16この故に我らは落胆せず、我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々あつたに新なり。17それ我らが受くる暫くしばらうの軽き患難は、極めて大なる永遠の重きなやみ光栄を得しむるなり。18我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時しばらうにして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント後4・16～18)

この故に我らは気落ちしない。外なる人——この肉体ですね——肉体をまとった人間というのとは歳と共に滅びていく。破れていき壊れていく。でも、内なる人、霊なる人、天の次元で新しく生まれた人は日々あつたに新たな人、日々あつたに成長していく。私たちがこの世で受けるしばらくの軽い患難は、極めて大なる永遠の重き光栄——「しばらくの軽い患難」、それに対して「永遠の重き光栄」、全部これはコントラストです——を得させると。

皆さん、この地上でいろんな悩みをお持ちです。自分の身体もなかなか自由にならなくなる。家族の者もだんだん難しい歳頃になってくる。その他社会の何でもすべて以前よりは住み心地が悪くなってくる。これがこの世の中です。けれども、それはしばらくの軽き患難であって、我々は永遠の重き光栄をいただいている。私たちの目を注ぐ、目のつけどころは見えるものではない。現象面ではない。見えないもの、永遠なるものを見ていく。

「見えるものは一時的であって、見えないものは永遠にいたるなり」という。



●魂は霊体を与えられる

そして、コリント後書5章に行きますと、私たちがこの地上を去った時にどういう姿になるか、ということが書かれている。

「我らは知る、我らの幕屋なる地上の家、壊るれば、神の賜う建造物、すなわち天にある、手にて造らぬ、永遠の家あることを。²我等はその幕屋にありて歎き、天より賜う住所をこの上に著んことを切に望む。³之を著るときは裸にてある事なからん。⁴我等この幕屋にありて重荷を負える如くに歎く、之を脱がんとあらで、此の上に著んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の生命に呑まれん為なり。⁵我らを此の事に適うものとなし、その証として御霊を賜いし者は神なり。⁶この故に我らは常に心強し、かつ身に居るうちは主より離れ居るを知る、⁷見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり。⁸斯く心強し、願うところは寧ろ身を離れて主と偕に居らんことなり。⁹然れば身に居るも身を離るるも、ただ御心に適わんことを力む。¹⁰我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、各人その身になしたる事に随いて報を受くべければなり。」(コリント後5・1~10)

私たちの幕屋である地上の家が——これは我々の身体のことを言っている——壊れれば、天上にある手にて造らない永遠の家がある。そういうことを私たちは知っている。我々はその幕屋にありて——地上の幕屋です——肉体を宿としているときは嘆いている。天上の霊の体、霊の住処をひたすら憧れている。それを上に着ようと思っている。これを着れば、霊魂は裸ではない。霊体を与えられる。魂は裸ではない。必ず霊体という体を与えられる。我々はこの地上においては、重荷を負っている者——すべて労する者、重荷を負う者——そのようにして嘆き苦しんでいる。しかし、それを脱ぐとはしない。肉体を脱ぐということは、別な言い方をしたら、自ら命を断つということです。それは願わない。霊の、永遠の生命を上にあいだこうとして呻いている。これ死ぬべき肉体がああキリストの永遠の生命に呑みこまれてしまうためである。我々をそれに相応しい者にしてくださったのは御霊である。また、御霊をくださった神さまである。

だから、私たちはいつも心強い。地上にあつてはイエスを見ていない。見ていないイエスを見るかのごとくに歩んでいく。

「見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり」

というのはそういうこと。イエスは見えない。しかしながら、見えないイエスを見えるがごとくに見て歩んでいく。斯く心強し、願うところは寧ろ身を離れて主と偕に居ることを願っている。だとすれば、地上で肉体を宿しているときも身を離れて霊の次元にいくときも、御心にかなうことだけが願いであるという。



●闇と光の霊の次元

「霊の次元」と言っていますが、いろいろあります。霊の次元は「闇」も霊の次元に入りますよ。霊の次元で、闇と光があるわけです。ヨハネ伝3章16節から、有名なところですよ。

「16それ神はその独子ひとりごを賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。17神その子を世に遣のこしたまえるは、世を審かんさば為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。19その審判さばは是なり。光、

「光」とはイエス・キリストのことです、

世にきたりしに、人その行為おこないの悪しきによりて、

行いが悪い人は光がこわいんです、悪事が暴あはかれるから。そういう人は暗闇を好むんです、見えないから。悪い行いの人は、

光よりも暗黒を愛したり。20すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21真まことをおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり。」(ヨハネ3・16～21)

と。こういうことが言われています。さっきのコリント後書の5章に行きますと、

「10我等はみな必ずキリストの審判さばの座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、各人その身になしたる事したに随したがいて報むくいを受くべければなり。」(コリント後

5・10)

というの、自分のやっている姿、自分が光を望んでいるのか、闇を好んでいくのか、自分で行き先を決めているというわけですよ、ヨハネ伝は。この5章でもそういうことがあります。

「我らはみな必ずキリストの審判の座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、みんな自分のやったことに随したがって審判を受けるんだ」と。さっきルカ伝の中で、

「身を殺したのち魂を何もできないものを恐れるな。身を殺したのち地獄じごくに陥おとしれる権威あるものを恐れよ」(ルカ12・4)

とありました。神さまのことです。この、

「各人その身になしたる事に随したがって報を受くべければなり」

というのがそのことではないですか。人間は地上だけではない。霊界に入った時に、その人が本当に地上で善をなしてきた親切な人は神さまから祝福を受ける。けれども、地上でさんざん悪事を働いたり、人をいじめたり、悪い事ばかりやってきた人たちは人を騙だますことはできても、神さまの目をごまかすことはできない。必ず審きを受けると、はつきりここで語られているわけです。



こういうことをやはり、世の中の人は知っておくべきですね。ご家庭でも子どもたちにはつきりそういうことを示すべきです。昔はよく、

「人はごまかしても、天をごまかすことはできないよ」

ということをお父さんお母さんは子どもたちに教えたようなんです。南原繁なんばらという昔、東大の総長をなさった方は非常に貧乏だった。お母さんが南原繁を背負いながら、道を歩いて、何かお金を借りに行かれた時にだったか、

「人は見てなくても、天は見ているよ」

ということをちゃんと子どもさんに、南原繁に教えこまれたそうです。それがずっとしみ込んでいたということをお母さんは告白している。やはり小さい時から、

「人はごまかしても、神さまはごまかせないよ」

ということをきちんと子どもさん方に伝えるということ。それから、

「この世でいじめている子はあとで大変な不幸な目にあうんだからね。いじめられるほうも可哀相かわいそうだけれども、いじめるほうがもつと可哀相だ。そのくらいの気持ちになりなさいよね」

と言って、親御さんが子どもさんを一緒に背負ってあげる。また、必要があれば、いじめる子どものところに出かけて行って、

「あなた、どうしてそんなことをやるの。何かあなた、自分で苦しいことがあるんじゃないの。うつぶんを晴らしたいことがあるんじゃないの。それをうちの子どもにぶつけているんじゃないの?」

と。責めるのではなくて、

「一緒に苦しみを荷なうからね、先生には言わないからね」

と、そういう形で出かけて行ったらどうなんだろうかなと思う。これは私の想像ですよ、自分でやってないから。何かそういうことができる心のゆとり、これはやはりキリストを知っている方は心のゆとりが持っています。どんなことにでつくわしても、そこにゆとりがあります。けれども、キリストを知らない方は、もうオタオタするだけではないかと思う。

●なんじら心を騒がすな

キリストが我々に語っておられる言葉で、好きなのは、

「なんじら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ」

ヨハネ伝14章です。何かあったら心が騒ぐでしょ。「あつ、地震だ。どないしよう。机の下に入れ!」なんて。でも、キリストは、

「なんじら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ」

と。ヨハネ伝14章をちよつと開いてください。

「1『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2わが父の家には



住処^{すみか}におおし、然らず^{しか}ば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために^{とこころ}処を備えに往く。もし³往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

ここからはキリストの遺言ですよ、お別れにあたって、「もうこれで、あなた方とはお別れだ。だから、最後にこういうことだけはお伝えしたい」

と行って、お話になった。それが編集されて、こういう形になって残った。その時に、「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。私はあなた方のために天国に場所を用意しに行く。用意ができたなら、天国の準備ができたなら、また帰ってくるよ。私が居る所にあなた方も居るためだ」

イエスはいつも、「あなた方と一緒にいたい」と、こう言ってくれました。そして、10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は、己によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業^{みわざ}をおこない給うなり。11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。

「我は父に居り、父は我に居たもう」ということを仰つて、そして、あなた方と一緒に居りたいということはずつと以下に仰るんですが、19 節に、

19 暫^{しばら}くせば世は復^{また}われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活^いくれば汝らも活^いくべければなり。

しばらくしたら、世の人は私を見なくなる。十字架でお亡くなりになりますから、肉体の屍^{しかばね}体は見ることはできても、イエスご自身の活けるイエス・キリストはもう見ることはできない。けれども、あなた方はちがう。私は生きる。お前たちも生きるんだと。これはご復活のご自分を指しておられる。そして、聖霊となつて、あなた方の所に帰つてきて、父なる神と御子なるキリスト、聖霊のイエスさま、そして我々と、四者一体となるということとを預言しておられる。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21 わが誠命^{いましめ}を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。

我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己^{おらわ}を顕^{あらわ}すべし』
と云つて、

23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言^{ことば}を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許^{もと}に來りて住^{すま}かを之とともにせん。

人がもし私を愛するならば、私の言葉を守るだろう。私の父はその方を愛し、我等——父なる神と私(キリスト)——はそこで住^{すま}かを一緒にする。だから、

「父なる神さま・御子なるキリスト・聖霊のキリストそして我々と、四者が一体となる」



ということをごこで約束しておられる。それから更に、

「助け主、聖霊をあなた方につかわす」

ということも約束されている。この聖霊は平安を与え給う霊である。

26 助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。27 われ平安を汝らに遣す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与う如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。」(ヨハネ14・1〜27)

「わが平安を汝らに与える」

という。私は、クリスチャンの共通にあるものは、平安だと思う。霊の賜物はさまざまです。超能力をいただく方もあるかもしれませんが。預言や異言を賜る方もあるかもしれませんが。けれども、共通して言えることは、平安と愛ですね。その人の中には愛が、平安がある。その人の中には愛が宿っている。キリストの愛が。これが共通点ではないかと思う。そして、

「愛が最高である」

というのがコリント前書13章です。

「たとえ我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鏡鉢の如し。……4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、……13 げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」(コリント前13・1〜13)

とありますね。

●聖書の中の宝物発見の旅

こういうところは本当にみな繋がっています。そういうものを、どうぞ皆さんも、数珠繋ぎにつなげて受けとってほしいんです、御言群という形ですね。御言群がいくつかある。今なにか「古墳群」とかいつて奈良などでやっています、「ここは古墳がいっぱいある」とか。そんな古墳なんて探したってしょうがない。聖書の中の御言群を探して、これは永遠の生命の、古墳ならぬ活ける生命の御霊が宿っている宝物である。そういう宝物発見の旅を、皆さん、続けていく。そういうふうな気持ちで、

「もう聖書とは離れられません」

というふうになっていただいたい。ヨハネ伝の14章から16章は本当にありがたいところ。なんとキリストは我らのことをかくまでも思っていてくださるのかと、そう思いますよ。そして、17章へ来たら、最後の祈りが出てきて、

「イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来り、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』

「父よ、時きたれり、今こそ子としての栄光を顕してください」



と。それまでは、一度も自分のことを祈られなかった。この時だけは、「どうぞ、今こそ、あなたからかつて天においていただいていた私の栄光を今、地上においても、どうぞ、顕してください」

と、初めて、まあある種のわがままの祈りをここでなされた。「汝の子の栄光を今あらわしてください」と。

²汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとして、万民を治むる権威を子に賜いたればなり。³永遠の生命は、唯一の真の神にいます汝と、なんじの遣し給いしイエス・キリストとを知るにあり。

「永遠の生命とは、唯一の真の神でいますあなたと、あなたがお遣しくくださったこのイエス・キリスト、この方と一つになることが永遠の生命です」

と言われた。永遠の生命とは観念的なものではない。

「唯一の真の神でいらつしやるあなたと、あなたがお遣しになったキリスト——今でいうなら、聖霊のイエスキリスト——本当に一つとなるということ、これが実は永遠の生命なんです」

と言われました。それから今度は、

¹²我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。

「あなたが私を世に遣わしてくださいのように、今度は私は弟子たちを世に遣わします。私が地上にいたときにはあなたの御名の中に彼らを守ってきました。けれども、今はもう地上からいなくなります。だから、どうぞ、あなたが彼らを守ってやってください」

という、それが以下の祈りになってきます。18節に、

¹⁸汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らを世に遣せり。¹⁹また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん為なり。²⁰我かれらの為のみならず、その言によりて我を信する者のためにも願う。²¹これ皆一つとならん為なり。(ヨハネ17:1~21)

「あなたが私を世に遣してくださいのように、今度は私も彼らを世に遣しました。それからまた、彼らを通して御言を聞く者たち——これが私たち異邦人です——がみな一つとなるためです」

と。弟子たちを通して、ユダヤの民は改めて神の言を聞いたんです。異邦人はパウロを通して聞いた。その異邦人伝道のパウロの流れをくんで、ルターの宗教改革があり、そして私たちが今、この福音を、内村鑑三・小池辰雄という流れの福音をいただいているということになります。そういう者たちのために祈ってくださいているのが、この17章の祈りです。



● 我は火を地に投ぜんとて来れり

今日はルカ伝12章というのが主題でしたけれども、お話をしていればきりがありません。「我は火を投ぜんために来たれり」と、これが一番ピークのところですね。49節、

「49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思い逼ること如何ばかりぞや。」(ルカ12・49〜50)

と。「受くべきバプテスマとは」十字架のバプテスマ、血のバプテスマです。イエスという方は、祈っておられたら眩く輝いてそのまま天に往ってしまう方なんです。これを絶対忘れないでください。そのことがあの山上の変貌のところでも顕れているわけです。ルカ伝でいいますと、9章に出てきます。マタイ伝でもイエスは弟子たちに対して、

「私のことを人々は何と言っているかね？」

と、お尋ねになっています。ここでも「人々は何と言ってますかね」と聞いた。

「18 イエス人々を離れて祈り居給うとき、弟子たち偕におりに、問いて言いたもう『群衆は我を誰というか』19 答えて言う『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は古の預言者の一人よみがえりたりと言う』20 イエス言い給う『なんじらは我を誰と言うか』ペテロ答えて言う『神のキリストなり』」

と。「キリスト」というのは、神さまから「油注がれた者」また「メシヤ」という言葉です。そう告白したら、イエスが、

「メシヤは必ず十字架にかけられて殺される」

ということを仰る。そんなメシヤというのは、弟子たちには絶対に受け入れがたいものです。イエスが復活されてからも、まだまだ彼らは目覚めていない。復活されたキリストについては告白します、

「イエスは甦えられた。十字架につけたイエスを神さまは甦えらせて、復活させた。だから、これで救い主ということが証明された」

「十字架は、我々が聖霊という永遠の生命をいただくためにいかに大事であるか、我々自身の贖いのために十字架がどれだけ必要であるか」

22 『人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日めに甦えるべし』

この「甦えるべし」の「べし」は「必然である」ということ。それから一同のものに、「私に従ってくるということは大変なことだ。いいことづくめではない。むしろ、苦しいことが多いよ」と言う。

23 また一同の者に言いたもう『人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、日々



おのが十字架を負いて我に従え。

これが「自分」という十字架、自分自身が十字架だということ。それからこの世では「十字架を負う」という、キリストのあの十字架を一緒に負うという、二重の意味があると思う。

24 己が生命を救わんとする者は之を失い、我がために己が生命を失うその人は之を救わん。25 人、全世界を贏くとも、己をうしない己を損せば、何の益あらんや。26 我と我が言とを恥ずる者をば、人の子もまた、己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥ずべし。

「たとえ全世界をもうけても、本当の生命、永遠の生命を失うならば、なにもプラスにならない。また、地上で私を恥じとして拒む者は、それを私もやがて天において、『知らない』と言うよ」

と言われる。そのあとで、一週間後に山に登られた。そして変貌される。だから、十字架のことを預言されたその六日後あるいは八日後に、十字架の受難を告知されたのちに、永遠の輝きを見せておられる。この二つは結びついているということなのです。

ここは素晴らしいでしょ。ルカ伝では「八日のち」と書いてありますね。

28 これらの言をいい給いしのち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登り給う。(ルカ9・18〜28)

ペテロ、ヨハネ、ヤコブのこの三人しか連れて行かない。神の国の奥義というのは、簡単に群衆には示されない。イエスは、癒しをなさる時でも、ペテロ、ヨハネ、ヤコブといった直弟子たちと面親だけで、他の者たちは拒絶しておられるでしょ。変なざわつく霊が邪魔をする。本当に神一すじという集中できる者だけを連れて、そして

「タリタ、クミニ！」(少女よ、起きよ！)

ですよ。そうしたら甦ってきた。イエスは何も魔術師ではないですから、神の霊によって御業をなさっています。神の霊が働く場をそこにつくりださないと、神さまの霊は働かない。ルカ伝では、

「キリストはナザレではあまり御業ができなかった」

と書いてある。

「あれはヨセフの子どもではないか。大工の小作ではないか」

と、みな肉の思いでイエスを見ている。そしたら、イエスの御業は働かない。でも、そういうことを知らない所では、イエスの霊の働きはあざやかに起こるわけです。そういうこともちゃんと弁えておいていただきたいと思えます。ここでは山上の変貌です。

「28……ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登り給う。29 かくて祈り給うほどに、御顔の状かわり、其の衣白くなりて輝けり。30 視よ、

二人の人ありてイエスと共に語る。これはモーセとエリヤとにて、31 栄光のうち現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言いいたる



なり。」(ルカ9・28～31)

文語訳では「逝去」と書いてある。口語訳では、

「栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことに
て話していたのである。」(口語訳)

「逝去」を「最後のこと」と書いてある。この原文は「エクソードス」「脱出」というさうです。この地上を抜け出して行かれること。その前にちゃんと十字架のことを言っておられるでしょ。弟子たちに自分は、

「人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺

され、三日めに甦えるべし」

ということをはつきり仰っている。受難があつて、そのあと八日後に眩い姿まぼゆに変わられる。この世を脱出していかれる。「出エジプト」ならぬ「出現世」です。それを「如何なるさまで」ということをエリヤとモーセにご相談なさっている。そこに居合わせたペテロはうわごとを言っている。あまりにも凄惨なものを見せられたから。そういう場面です。

³²ペテロ及び共におる者いたく睡気ねむけざしたれど、目を覚ましてイエスの栄光

およびとも偕ともに立つ二人を見たり。³³二人の者イエスと別れんとする時、ペテロ、

イエスに言う『君よ、我らの此処ここに居るは善し、我ら三つの廬いおりを造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの為にせん』彼は言う所を知らざりき。

自分で何を言っているのかわからない。

³⁴この事を言い居るほどに、雲おこりて彼らを覆う。雲の中に入りしとき、弟子たち懼おそれたり。³⁵雲より声出でて言う『これは我が選おびたる子なり、汝ら之に聴け』³⁶声出でしとき、唯イエスひとり見え給う。弟子たち黙して、

見し事を何一つ其の頃たれにも告げざりき。」(ルカ9・28～36)

こういうことが書いてある。こういう場面は本当にリアリティです。イエスというのはこういうお方なんです。

●イエスの心を心とする

そしてその通りに栄光の姿で顕れて来られたのがあの復活という現象です。使徒行伝やルカ伝24章でイエスの復活の場面が出てきますが、あれはなにも死人が息を吹き返したという、そんなレベルではない。イエスの栄光の姿が顕れてきた。本来の姿が忽然として顕れてきた。それを「復活」と人は呼んでいるだけです。ルカ伝24章では、弟子たちはわからなくてとまどっている。エマオへ旅立っていく。そこへ旅人の姿で顕れてくる。そういうことが出てきます。そういうように、イエスという方はもう、地上におられるときから霊の次元をちゃんと持つておられますから、その次元から語っておられると、人々は理解



できない。みんなこの世的な肉の次元でしか理解しようとしな。もうギャップがある。だから、さっきのルカ伝12章で、

「われには受くべきバプテスマあり。思い迫ることいかばかりぞや」(ルカ 12・50)

と仰っていることは、そういうキリストの苦しみが出ていると思います。イエスだけが天の次元をひっさげて地上に来られた。けれども、この地上の者たちは、宗教家たちも含めて、誰ひとりイエスを受けとり理解しようとしな。自分たちの肉の次元でしか判断しな。まさに「水と油」とはこのことなんです。さっきの、

「此等のことを^{かしこ}智きもの^{さと}慧き者に隠して、^{みどりじ}嬰兒に顕したまえり」(ルカ10・21)

という祈りも、そういうギャップの嘆き。それに対する神さまの側からの慰め。それに対する感謝の祈り。そんなふうに私には読みとれるんです。

こういうイエスが地上におられたときの苦しみ、それはほとんどの人は理解していません。サンダーシングが書いていたと思います。

「イエスが地上におられたとき、地上で生きるということ自体がもうイエスにとつてどれだけ苦しかっただろうか」

と彼は書いています。というのは、罪の世だから。

ちやうど、例えて言うなら、私はかつて新幹線に乗ったとき、3号車というのは喫煙車で車内はもう煙でモウモウです。ところが、私は時間に遅れて6号車あたりにとび乗って、それから1号車の指定席へ行くのに、「我には受くべきバプテスマあり」と(笑)、タバコの煙のバプテスマ。もう口と鼻をふさいで必死になってそこを通る。ところが、その中にいる人は全然気づかない。つまり、世の中の人は罪の世にありながら、罪の世に気づかない。ニコチンに気づかない。けれども、贖われた御霊の子はそこを通り抜けるのに必死になってぐりぬける。それを実感しました。皆さんもぜひ、あの3号車の喫煙車を通りぬけてみてください。だから、サンダーシングが言ってますように、

「イエスがこの地上で生きているということ自体がどんなにイエスにとって苦しかっただろうか」

と。ちやうど私が3号車を通り抜けるような苦しみを、イエスは地上にあるだけで味わわれたに違いないということサンダーシングが言っていました。我々はどんなに理解しようなんて思ったって、本当にイエスの地上での御苦しみ、嘆き、祈り、それはとてもじゃない、理解できないと思うんです。けれども、

「ごうぞ、あなたの御意を^{みこころ}心とさせてください」
と願う。

「イエスの心を心とせよ」

と。ピリピ書に出てきます。それが私たちの願いです。ピリピ書2章を見てください。5節、



「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、⁷反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。¹⁰これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉とくイエスの名によりて膝を屈め、¹¹且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。」
(ピリピ2・5〜11)

その通りですね。そしてこういうあなた方だからと。²章の始めからもう一度見ますと、「¹この故に若しキリストによる勧め、愛による慰安、御霊の交際、また憐憫と慈悲とあらば、²なんじら念を同じうし、愛を同じうし、心を合わせ、思うことを一つにして、我が喜びを充しめよ。³何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、おのおの謙遜をもて互いに人を己に勝れりとせよ。⁴おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。」(ピリピ2・1〜4)

そして、

「あなた方はキリスト・イエスの心を心とせよ」

と、これなんです。「キリスト・イエスの心を心とする」とはどういうことかというところ、イエスという方はもともと神の子でいらつしやつた。霊の次元の神の次元にいらつしやつたのが、肉の次元におりてきて、人間の姿をとつて、そしてさんざん苦しんでくださった。十字架の死にいたるまで苦しんでくださった。こんな方を神さまは放っておくはずがない。この方の本質は永遠の生命だった。その本質が顕われたままで、これが復活という事態だ。そうなるともう、我々は「イエスさま、イエスさま」と、栄光をキリストに帰していくことしかないじゃないですか。

「¹²されば我が愛する者よ、なんじら常に服いしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服い、畏れ戦きて己が救を全うせよ。」

そして今度は、「あなた方は」といつて、地上の兄弟たちに対して、

「私は今は一緒にいない、離れている。けれども、いたときにあなた方が従順であつたように、ますます従い、畏れ戦いてご自分の救いを完全なものにしなさい」と。ただ十字架を言葉で受けとっているだけではなくて、あなた方自身が、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、聖霊のキリストがわがうちに在りて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節の現実をしつかり受けとつてほしい、というのがこのパウロの気持ちですね。だから、

¹³神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業



を行わしめ給えばなり。¹⁴なんじら^{つひや}眩かず疑わずして、凡ての事をおこなえ。是なんじら^{つひや}責むべき所なく素直にして、此の曲れる^{よこしま}邪悪なる時代に在りて神の瑕^{きず}なき子とならん為なり。汝らは生命の^{いのち}言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。

「神はあなたの方の中に働いて、志をたて、業を行わせていらつしやる。だから、どんなことでも眩^{つひや}かないで、疑わないで、行いなさい。そうやって、あなた方は瑕^{きず}なき御霊の子となつて、やがて神の国がきたときに輝くんだから。あなた方は既にこの悪しき世の中で輝いているんだから」

とパウロは言ってます。そして、

¹⁸かく汝等もよろこべ、我とともに喜べ。

「私と一緒に喜んでほしい」と、ずっと言いまして、それから、ひとつの嘆きがここに書かれています。21節、

21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯^{ただ}おのれの事のみを求む」(ピリピ 2・12～21)

これはこの世の人のことを言われてますけれども、クリスチャンだつてこういうことが多いんですよ。本当にキリストのために思わない。自分の幸せのためにキリストを出汁^{だし}に使っている。

「イエスキさま、こうしてください、あれしてください。ここの病気を治してください」と、全部、「自分、自分、自分」なんです。それはキリストは優しいから、

「何でも願い求めよ。そうしたら、かなえてあげるよ」

と言つてくれました。けれども、イエスの御意は、

「まず神の国と神の義を。まず天のことを、まず御国を求めよ」

と、それがイエスの本当のお心なんです。御国を求める。キリストの心を心とする。

「そうすれば、あなたに必要なことは全部、私がちゃんと顧みてあげるから」

と。ところが、クリスチャンがまず、

「クリスチャンとしてお願いします。これを聞いてください、あれを聞いてください。あれをやってください。はい、聞いていただいてありがとうございます」

なんて、「そんな祈りはいやだよ」と、私だったらそう思いますね、向こうでキリストだったら。

「まず神の国と神の義を、まず天の父の御国を求めよ」(マタイ6・33)

と仰った。そこから始まるのがクリスチャンではないですか。

「あなた方は既に死にたる者にして、あなたの生命はイエス・キリストのうちに隠されてあるんだよ」(コロサイ3・3)

と。そういうふうにはつきり、



「十字架で私は死んでいます。われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」(ガラテヤ2・20)

という、そこをスタート地点にして、それから天国人として御意を求めていくというのがクリスチャンの在り方なんです。ところが、おねだりするクリスチャンが多すぎるように、私は思う。祈りが叶えられると、「ハレルヤ！ ハレルヤ！」という。それはそれも否定はしませんけれども、やはり御意というのは、そんなところにあるのではない。もつともつと高い次元を求めていらつしやると、私は思います。

●なぜ私は永遠の闇に突き落とされるのか

どうぞ、ここにいらつしやる方々は、「キリストの心を心とする」というのは、キリストが地上におられたときに何を求めておられたか。

「われ火を投ぜんために来たれり。されど受くべきバプテスマがある。思い迫ることいかばかりぞや」(ルカ12・49～50)

と。あれがキリストの心です。聖霊を与えたい。けれども、聖霊を与えるには、私は血のバプテスマ、十字架を通り抜けなければならぬ。しかしそれを果たすためには、本当にキリストは肉体にあつて苦しまれたでしょ。ゲツセマネで血の汗を流して祈られたでしょ。何も命が惜しいのではない。神さまと一つである世界から引き離されて、神無き闇に永遠に突き落とされる。それは耐えられない。

「どうして、それが必要なんですか。私はあなたと一時も離れたことがなかつたじやないですか。あなたの愛の中にいだかれ、あなたの愛の中に生き、あなたの心を心として、私は御意を地上に現してきたではないですか」

と。死人は甦えられ、貧しい者は福音を聞かされ、「あのヨハネにそう言いなさい」とキリストは言われたでしょ。そういうことを、

「あなたの御意だから、私はやってきました。御意から離れて何一つやってこなかった。その私がなぜ、あなたから引き離されて、永遠の闇の中に突き落とされる必要があるんですか。それは私には耐えられませんか」

と。これが私の理解するゲツセマネの祈りなんです。命が惜しいのではない。父なる神さまと一つであった。それが永遠に引き裂かれて、永遠に神無きところに住まうという、それが耐えられない。

「どうぞ、そうでない方法で彼らを救うことはできないんですか」ところが、

「他にないんだよ」

「わかりました。それでは、御言に、御意に従います」

と、決然と立って、ゴルゴタの丘を歩まれた。そして、十字架の上で、



「彼らを赦してください。彼らは自分で何をやっているかわからないからです」
(ルカ23・34)

と。そこまでのことができる方、言葉通りの方、そんなお方を他には私は知りませんね。
「わが語りし言は靈なり生命なり」(ヨハネ6・63)
ということを本当に貫いておられます。そして、

「敵のために祈れ」(ルカ6・28)

ということをイエスは実践なさいました。ひとつも恨みがましいことを言っておられない。
そういうお方を前にして、イエスを蹴飛ばす人は、私はその方の気持ちはわかりません。
そういうお方を知らないから、

「イエスとは、私は縁がありません。私は日本国民ですから、イスラエルとは関係
ありません。私は仏教徒ですから、これでいいんです」

と言って、拒んでおられるけれども、それは決してイエスを踏みにじっているというよりも知らないからなんです。自分がどんなに罪深く、神さまの前にやりきれない存在か、神の審きの前に立ってない存在か、そのことを深く考えない。だから、イエスという方の十字架の凄さ、愛の深さ、イエスの歩かれた道の険しさ、そういうことをイエスの身になって自分で味わおうとなされない。

イエスの弟子ということは「歩みを共にする」ということですよ。きつき、「ミットライデン」「痛みを共にする」ということが「同情」だと言いました。そのように、キリストさまと痛みを分かち合う、苦しみを分かち合う、そういう生き方をするのがクリスチャンなんです。だから、クリスチャンはこの世で、いわゆる世的な幸せ、安楽、それを求めましたら、それは筋違いだと思います。そういうことは、求めていなくても、キリストのほうから下さったら、「ありがとうございます」といって感謝したらいいけれども、それ自体を求めていくのは、私はよくないと思います、いわゆる幸福主義というのは。

ヒルティは『幸福論』というのを書きましたけれども、やはり、幸福を目当てにしたらいけない。神の国と神の義を求めたら、ひとりでに具わってくるものが「幸福感」なんです。「あつ、しあわせだな」と。

「ああ、いい湯だなあ〜」
という唄がありますね(笑)。キリストを求めていけば、「いい湯だな」というものが伴ってくる。

「ああ、ありがとうございます。それに相応しくない者をこんなに祝福してください
っている。本当にありがとうございます」

という感謝と讚美が出てくる。それを私はクリスチャンの在り方であろうと思っている。
そんなことで、いろんなことを語りました。今日の主題である、「此の火既に燃えたらんには」というキリストの熱い願い、それをペンテコステで成就していきますから、私たち



はそういうドラマの中に生かされている。

本当にこの新約聖書はよくできていますね。黙示録は、私は敬遠していましたがけれども、黙示録も七つの教会に対して御使の言葉がある。あそこだけはよく読んでください。素晴らしいのはフィラデルフィアの教会、それから、叱られているのはラオデキヤの教会。現代はこのラオデキヤ教会の現代版だといわれている。「フィラデルフィア」というのは「忠実」ということです。これは非常に誉められている教会です。七つの教会はそれぞれ、

「あなたにはこういういいところがある。しかし、こういう欠点もある」と、それぞれ長所と短所をちゃんと指摘されて、

「こうありなさいよ」

という励ましの言葉がある。そして、一番厳しい言葉を頂いているのがラオデキヤの教会で、

「あんたは生ぬるい。冷たいか熱いかどっちかであってほしい。生ぬるいのは

吐き出すから」

と言われている。現在の教会の姿はまさに、憲法で保証された信教の自由のゆえに、生ぬるくなってちつとも燃えていない。だから、燃える御霊、

「この火既に燃えたらんには」

と。「火の如き」という。

「我は火を投ぜんために来たれり」

と。ところが、火が燃えていなければ、何も始まらない。それは「聖霊のバプテスマ」ということで初めて成就する。そのためにはキリストの十字架が必要だった。十字架が成就した以上は、私たちはそれを受けとって、御霊のクリスチャンとして、証人として働いていく。神の言を語らせられる。

「その者には限りなく聖霊を下さる」

と、ヨハネ伝にあります。全部つながっていますからね、霊の次元は。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)

とか。そうなつてくると、本当に聖書は、御言が活き活きと自分の中で躍りだします。そういうことをぜひ味わってください。私の中で躍り出したのは最近ですから。

「86歳になったら、私も躍りだしますから」

なんて言わないでください。

「師(古人)の跡をもとめず、師(古人)の求めたる所をもとめよ」

という、芭蕉の言葉がありますけれども。私たちは、目標はいつもそういう高いところに置いて、そして進んで行きたいと思えます。それでは、今日はこれで終わります。

● 祈り

それではお祈りをさせていただきます。しばらく、皆さん、黙祷なさってください。



主さま、「語るも聴くも同じこと」と言いますように、僕もその立場に立つて、本当にそのことを思います。語るのは告白でござります。主キリストさまが私の上にどんな素晴らしいことをしてくださったか。世の創の前より選はじめび分わかかって、時満ちてあなたのものとしてくださった、そのご計画を思います。

エペソ書にも書かれています、「世の初めより選わかび分わかちて」とありますように、天地創造の初めより、ここにいらつしやる皆さま一人ひとりのことをあなたは心にとめて、あなたのプログラムの中に組み入れておられました。そして、時満ちて、最もふさわしい時にあなただご自身を現あらわしてくださったのでござります。

「誇る者は主を誇れ」

とありますように、本当に私たちは主さまに出会わせていただいて、初めて己の何たるかを知り、生きるということのどういうことであるかを知らせていただき、生きがいということは何かということもまた教えていただきました。

人生は神讚美であると言います。どうぞ、ここにいらつしやるお一人お一人の日々の生活が、聖書を生きて、キリストを生きてのこと。即ち日々の主を讚たたえ、父なる神さまを讚たたえ、聖霊となつて宿とどつてくださるあなたを讚たたえ、そしてあなたのご愛を、世の人のために流ながしていく、そういう自分としておん用もちいてくださいという祈りの中に生きることです。あなたが、どうぞ、お一人お一人の中に宿とどり、

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、ヨハネ伝でお約束くださったように、父なる神さま・御子なるキリストさま・聖霊のイエスさま・そして御霊の子らである兄弟姉妹が、四位一体となつて、地上にあなたの御意を、神の国を築いていくことができますように、お一人お一人を祝福し、集会を祝福してください。今日ここに居られない方々、また各地の兄弟姉妹方、またその集いを、どうぞ祝福してくださるように、希こいねがい奉たごります。

この讚美と感謝と祈りを主イエス・キリストの尊い御名を通し御前にお献たまげいたします。アーメン。

